

〈論文〉

## 今日の経済学と「自由意志」

——「神の意志」と人間の「自由意志」のエラスムスの解釈を踏まえて——

### Modern Economics and Free Will

—— God Willing and Free Will based upon Erasmus's ideas ——

久保田 義 弘

#### 要 旨

本稿では、中世の大家として知られるデシデリウス・エラスムス（Desiderius Erasmus, 1466/1467年生-1536年没）が、特に彼の著作『評論「自由意志」』を通して人間の「自由意志」をどのように位置づけ、人間の行為・行動に信仰あるいは宗教がどのように影響すると考えていたのかを『聖書』の言葉の解釈と共に示し、さらに信仰や宗教がその今日の経済学との関係についても考察する。よって、本稿では、エラスムスの「自由意志」と経済学における消費者選択行動の関係に焦点をあてて、今日の経済学と人間の「自由意志」の関係を考察する。

キーワード：人間の「自由意志」、神の意志、神の恩恵、社会状態の二項関係、弱順序における選好、厳密な順序

#### はじめに

エラスムスは人間の「自由意志」について簡単に定義している。この自由意志を「人間が、永遠の救いへと導くような事がらへと自分自身を適応させたり、あるいはそのようなものから身をひるがえしたりしうる、人間の意志の力、と考えているのである」<sup>1</sup>とエラスムスは規定している。ここで「適応させる」とか「ひるがえす」とかは何を意味するのであろうか。人間の意志力を御霊（神の愛やその恩恵として表現される）に適応させる、あるいは御霊から身を翻し離れることを意味している。御霊に人間の意志力を適応させたり、それから翻したりすることが人間の「自由意志」である、とエラスムスは解釈している。この規定で人間の意志力<sup>2</sup>とは「欲する」あるいは「選択する」などを意味するが、『聖書』においては、そ

<sup>1</sup> エラスムス著（山内 宣訳）『評論「自由意志」』19ページ2行目。

の意志力は善を「欲する」、悪を「欲する」、生きることを「欲する」、あるいは死ぬことを「欲する」などや望む（あるいは望まない）、選択する（あるいは拒否する）、承認する（あるいは拒否する）、さらに、人間が意志する行為を行うところの能力、才能、素質、あるいは資質のことを指している、と考えられる。『聖書』の中において人間の「自由意志」とは何を意味しているかについてさらにもう少し丁寧にさぐることにしよう。エラスムスによると、その意志力とは、人が悔い改めのために努力を尽くし、神の憐れみを懇願し永遠の生命（人間の救い）に導くことをいみする。また、その意志力は、もし人が神を敬い仕えているならば、後ろに捨て去ったものを忘れ善きものへと前進することであろう、あるいはもし人が罪に陥るならば、あらゆる努力を尽しそれから逃れ、善き方向に向かうことであろう。このようにエラスムスは人間の「自由意志」を意志力として説明している。この「自由意志」があることによって人は救済（永遠の生命）に導かれることを『聖書』から読み取ることができる。永遠の生命とは人間が最高に幸福な状態（至福）に至っていること、と解釈される。

『聖書』において、人の行為・行動を律し社会秩序を維持するものに律法が示された。律法<sup>3</sup>には、自然の律法、わざの律法、信仰の律法がある。自然の律法は、すべての人の心に深く刻みこまれていると説明されるが、この自然の律法は人が自分自身にうけることを好まないことを他人になすことは不当であることを意味している。次に、わざの律法は、命令を出し、刑罰をもって脅す律法である。このわざの律法は、罪を倍加し、死を引き起こすことになる。このわざの律法は、神の恩恵なくては人が実現し得ないことを神は命じているからである。最後に、信仰の律法は、わざの律法より困難なことが命じられ、恩恵に支えられなければ不可能なことであるが、その恩恵によって容易に達成できるように導く。エラスムスに

<sup>2</sup> ルターは、エラスムスが「人間の意志力」について明瞭に定義していないと言う。ルターは『奴隷的意志について』（557ページ9行目参照）において、エラスムスの人間の「自由意志」の規定から、人間の「自由意志」を「人間の意志力」であると理解しているが、誤解である。エラスムスは、御霊に適應させる、あるいは御霊から逸れる人間の意志力として「自由意志」を規定しているからである。

ルターは、「意志そのもの」と「意志の働き」を区別し、人間の意志力を「意志そのものと意志の働きとの間に存在する」媒介であると説明している。すなわち「人間の意志力」は自由意志となる、とルターは解釈している。その上で、「自由意志」は「神一人は別として、誰にも帰属しない」と言う（上掲書『奴隷的意志について』（556ページ13から14行目参照））。

ルターによると「自由意志」は神に帰属し、エラスムスのように人間の「自由意志」は考えられないのである。「神の絶対的な命令のもとに一瞬たりとも自分の力で時を過ごすことのできない人間や天使を、まさに自由であるなどとは私たちは言わない」とルターは力説している（『奴隷的意志について』556ページ18から19行目）。

<sup>3</sup> 上掲書『評論「自由意志」』23ページ15から16行目に「律法は神が欲したもうところを示している。そしてもし服従しないならば刑罰を加え、服従するならば報償を提供しておられるのである」とある。これに続けて、神は「この能力を自由に善悪両方向へ動きうるものとして彼らに造りたもうたのである」とエラスムスは言う。エラスムスによると、神は人間の意志に選択する能力を残しているのである。

よると、信仰は罪で弱った理性を癒やし、弱くなった意志を愛によって強めるように促す。その信仰も愛も神の恩恵である。信仰も愛も希望と同様に徳の一つである。『創世記』第2章16節に「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取ってたべてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」<sup>4</sup>とあるが、これはわざの律法を言い表した『聖書』における表現に相当する。わざの律法を『聖書』のモーセの戒め(戒律)<sup>5</sup>にも対応させることができる。次に、信仰の律法の例を『福音書』から引いてみよう。『ルカによる福音書』第6章27節に「敵を愛し、憎む者に親切にせよ」、この第14章26節に「自分の命まで捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない」、その第9章23節に「日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」、あるいはその第12章32節に「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである」とある。また『ヨハネによる福音書』第16章33節に「しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」、『マタイによる福音書』第28章20節に「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたと共にいるのである」なども信仰の律法の例として挙げられる<sup>6</sup>。人間は、「この世」では、この律法を受け入れて行動することによって善を実行するとエラスムスは考えている。

エラスムスは、人間の「自由意志」にいかなる能力を賦与している(残している)のであろうか。エラスムスは、人間には神によって「選択する」力が残されている<sup>7</sup>と言い、その「選択する」能力は自発的であると言う。すなわち、「もし意志が自由でなかったなら、罪が帰せられることはなかったであろう。もし自発的のものでなかったなら、それは罪であることをやめるからである」<sup>8</sup>とエラスムスは言う。人間の意志決定(意志力)は自発的であるので、その責めはその人に向けられる、とエラスムスは考えている。人間はその意志決定する力(「自由意志」)によって悪い方の傾向に傾くかも知れないが、しかしその意志決定力(「自由意志」)は死滅させられることはない、とエラスムスは想定している。人間の「自由意志」には、どれほどの力があり、どれほど自由度があるのであろうか。この点について考察しておこう。最初の人アダムには識別する能力があった。つまり、願望すべきことと避けるべきことを区別する力があった。最初の人アダムは毀損されない理性ならびに毀損されない意志<sup>9</sup>をもって創造されたと想定されているので、この人は神の恩恵がなくともその意志は自

<sup>4</sup> 前掲書『評論「自由意志」』23ページ3から4行目。

<sup>5</sup> 「父母を敬うこと」、「殺してはならない」「姦淫してはならない」、「盗まぬこと」、「偽証しないこと」、「隣人の家をむさぼらぬ」こと、などがある。

<sup>6</sup> 前掲書『評論「自由意志」』23ページ8から12行目参照。

<sup>7</sup> 前掲書『評論「自由意志」』23ページ15から16行目参照。

<sup>8</sup> 前掲書『評論「自由意志」』24ページ1から3行目。

<sup>9</sup> この毀損されない意志は「欲すれば自ら善にそむいて悪へ迷い出ることが可能なほど自由であった」とエ

由であった<sup>10</sup>とエラスムスは想定している。その最初の人に神は命じているが、すなわち「神はまた人に彼の命令と戒めをくわえ言われた」<sup>11</sup>とある。これが最初の人にかされた原罪であり、神自身から人に加えられた罪であった。ここで罪とは、アダムが神の戒め（悪善を知る木から取って食べてはならない、という戒め）よりも妻エバを気遣って妻への愛の故にアダムの意志が毀損されたことである。ゆえにその意志から生まれる理性も毀損（破壊）されたのである。人間の魂の力あるいは理性が毀損される<sup>12</sup>と、選択するあるいは避けるなどの意志は理性の助けだけでは希望する（欲する）帰結に達することができなく、むしろ自由を失って罪<sup>13</sup>に陥ってしまい悪い方に向けられ、原罪を経験した人（およびその末裔も同様に）は「希望する」業を帰結することができなく、「欲する」物を手にし、「欲する」状態に達することができなくなる。神の恩恵がなければ、理性<sup>14</sup>は滅ぼされたままであり、併せてその意志の力も破壊されたままであり、「欲する業をなしえず、また「希望する」状態（たとえば最善の状態）に達し得ず、あるいは避けようと欲していた状態を避けることはできなくなり、そして最善の状態（最高の状態、永遠の生命）に達することはできない。

毀損された意志と理性に懲らしめられている人間はどの様にして永遠の生命（最高の幸福な状態）に達するのか。エラスムスはそこに至るために神の恩恵を持ちだしている。エラスムスは、聖アウグスティヌス<sup>15</sup>が能動的恩恵と呼んでいる恩恵を持ち出し、「聖アウグスティヌスと彼に追随している人々は、人間がおのれの力をたのみとすることが、いかに真の敬虔の破滅となるかということ熟考して見て、恩恵へ重きを置く方へ傾いている」<sup>16</sup>とアウグ

---

ラスムスは言う（前掲書『評論「自由意志」』20ページ16から17行目）。悪とは律法に反した行動にであることを意味する。

<sup>10</sup> 前掲書『評論「自由意志」』21ページ1から3行目参照。ここで、エラスムスは「人間においては、意志はまさしく自由であったから、新しい恩恵の助けなしに、無罪のうちに保たれるであろう」と言う。ここで恩恵とは神の意志である。

<sup>11</sup> 前掲書『評論「自由意志」』20ページ4行目参照。これは「ベン・シラの知恵」からの引用である。

<sup>12</sup> エラスムスは、魂の力すなわち理性は罪によって毀損されるが、消滅することはない、と想定している。

<sup>13</sup> エラスムスは、神の幫助がなければ、人間は罪へ向かう傾向があると見ている。エラスムスは「人間は、絶えず人間の努力を助ける神の恩恵の幫助のゆえに、正しい状態に保たれるが、一度犯した罪の痕跡から生じる、罪の傾向を欠いてはいないから、祖先の罪が子孫に伝えられるように、罪への傾向はすべての者に移されている」と言う（前掲書『評論「自由意志」』21ページ18から22ページ2行目）。人間の原罪のゆえに人間の理性ならびに意志力は毀損される、とエラスムスは考えている。

<sup>14</sup> エラスムスは「一部では理性は、すべてのもののうちにある生具の光によって照らされている」と言う（前掲書『評論「自由意志」』22ページ7から7行目）。『詩篇』第6篇1節「どうか、神がわれわれをあわれみ、われらを祝福し、そのみ顔をわれらの上に照らされるように」を引用し、『詩篇』第119篇105節「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」をエラスムスは引用している（前掲書『評論「自由意志」』22ページ8から10行目参照）。光は理性の譬喩である。

<sup>15</sup> アウグスティヌスやパウロは「人間が自らを救いに導くような何事かをなしうるということを否定している」、とエラスムスは理解している（前掲書『評論「自由意志」』25ページ16から17行目）。

スティヌスの立ち位置を紹介している。聖アウグスティヌスは、人間が「罪のとりこになっている」<sup>17</sup>と押さえ、「罪のとりこになっている人間が、生活を匡正するために戻って来ることができることや、人間が自らを救いに導くような何事かをなしうるということを」否定している<sup>18</sup>、とエラスムスは理解している。聖アウグスティヌスは、聖霊のより豊かな賜物によって信仰に加えられた愛を協力的恩恵<sup>19</sup>と呼び、この恩恵が人間を救済すると考えている。エラスムスは、人間の「自由意志」も恩恵も同じ業に働くが、神の恩恵が業の‘導き手’であって人間の「自由意志」の同伴者ではないと言う<sup>20</sup>。

エラスムスは、神の恩恵と人間の「自由意志」の協同によって人間が行為し行動しうると見做している。エラスムスは、聖アウグスティヌスにならって神の恩恵を3種に分けて説明している。それを、第一に自然的恩恵（自然的影響<sup>21</sup>）、第二に励起的恩恵<sup>22</sup>あるいは先行的恩恵<sup>23</sup>あるいは能動的恩恵<sup>24</sup>、第三に協力的恩恵<sup>25</sup>に分解している。これらの3つの恩恵は同じ恩恵であるが、それぞれは、その作用の仕方によって仕分けられている。第一のもの（自然的影響）が刺激し、第二のもの（励起的恩恵）が促進し、第三のもの（協力的恩恵）が完成するのである。エラスムスは神の恩恵を三段階に分けてその作用を説明している。これは、努力する人々が得ようと務めているものを得るに至るまで、これらの人々を助ける<sup>26</sup>ことを意味している。神の恩恵をより詳しく説明することにしよう。この恩恵によって罪人を改心へと刺激し、改心するように刺激された人は、自分自身を嫌うようになり、罪を犯そうとする衝動を抑えるために、祈禱し説教を聞き、あるいは道徳的な善き行いによって、神の最高の恩恵の志願者でもあるかのように振る舞う。この恩恵は、各自の意志決定のうちに残されたものを「決して強制はしていない神の助けに全力を尽くして適合」<sup>27</sup>させることによってより善い生活へと招くことを可能にしている。エラスムスは「私たちの意志を恩恵の方に向けるのもそらせるのも、私たちの意志決定のうちにある」<sup>28</sup>と説明し、神の恩恵に向かう人

<sup>16</sup> 前掲書『評論「自由意志」』25ページ12から14行目。

<sup>17</sup> 前掲書『評論「自由意志」』25ページ15行目。

<sup>18</sup> 前掲書『評論「自由意志」』25ページ15から16行目参照。

<sup>19</sup> この恩恵を「努力する人々が得ようと努めるものを得るに至るまで、これらの人々を助ける」とエラスムスは説明している（前掲書『評論「自由意志」』26ページ1から3行目参照）。

<sup>20</sup> 前掲書『評論「自由意志」』26ページ3行目参照。

<sup>21</sup> 自然的影響は、*influxus naturalis* の訳である。

<sup>22</sup> 励起的恩恵は、*gratia exstimulans* の訳である。

<sup>23</sup> 先行的恩恵は、*gratia praeveniens* の訳である。

<sup>24</sup> 能動的恩恵は、*gratia operans* の訳である。これはアウグスティヌスによる。

<sup>25</sup> 協力的恩恵は、*gratia cooperans* の訳である。

<sup>26</sup> 前掲書『評論「自由意志」』26ページ2から3行目参照。

<sup>27</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ11行目。

<sup>28</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ11から12行目。

人間の意志(「自由意志」)を強調している。そして、人間に対する神の無限の愛が人々を‘神意にかなうものにする恩恵’(神の協力的恩恵)をもってなすが、それでも人間が失敗することもあるので、いかなる罪人も自己に確実なことをなしえないかも知れないが、それでも自己に絶望すべきではなく、何人も自身の咎による以外は滅びないのである<sup>29</sup>。

本稿の構成について説明する。第1節では人間の「自由意志」と「神の意志」について説明し、次に、人間の「自由意志」を過小評価する見解と人間の「自由意志」を過大評価する見解について考察・検討する。第2節では神の恩恵、神の恩恵の定義ならびに三種の恩恵について説明し、さらに人間の「自由意志」と神の恩恵の関係について考察し人間の「自由意志」も神の恩恵も人間の行為・行動には関係しうることを説明する。第3節では今日の経済学における「自由意志」について考察する。人間の普遍的な行動原理と社会・経済状態、および経済学における善い社会(経済)状態の選択行為と行動について考察・検討する。今日の経済学における社会・経済状態の選好を数学的な記号を用いて表現する。特に、社会・経済状態の弱順序における選好関係を示し、幸福度あるいは快樂としての効用関数を例示する。たとえば、聴覚に係わるものや嗅覚に係わるものの喜び・楽しみ(快樂)を効用関数の分離可能性を仮定して提示する。最後に、『聖書』の飽和点のある世界から今日の市民社会の制約のある世界に向かう必要性を指摘する。

## 第1節 人間の「自由意志」と「神の意志」

エラスムスは、「神の意志」と人間の「自由意志」が人間の行為・行動に作用し、事(業)を帰結させると考えている。どのように作用するかについてエラスムスの見解を参考にしながら説明してみよう。

エラスムスは、敬虔に対する熱心さや救いに絶望することの弊害の反省から人間の「自由意志」に過分の役割を置く人たちがいるとしながらも、他方には、この考えとは対立するが、人間の「自由意志」を過小に評価し、単純な従順に陥っているキリスト教精神を主張する人々がいる、と述べている。エラスムス自身は、いずれの考えにも明確な態度を表明してはいないが、この二つの考え(主張)は極論であるとし、いずれの見解についてもその「文意を何らの仕方で控え目にとらざるをえなくされる」<sup>30</sup>とエラスムスは言っている。

### 1.1 人間の「自由意志」を過小評価する見解

上で言及した後者の極論では、人間は「いっさいをあげて神の指図に依存」<sup>31</sup>し、人間は神

---

<sup>29</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ14から18行目参照。

<sup>30</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ2行目。

との契約に「いっさいの希望と信頼とをおき」<sup>32</sup>、自分自身が「おのれの力にたよってはいかに悲惨であるかを認識」<sup>33</sup>し、無償で与えられる「神の無限の憐憫を讃嘆し愛し」<sup>34</sup>、「神のみこころに自分を完全に服従」<sup>35</sup>させ、自分自身のわざでなく、むしろ「ほまれのすべてを神の恩恵に帰し」<sup>36</sup>、「人間は神のみ霊の生きた器以外のものではない」<sup>37</sup>と説明される。そして神のみ霊は、その器を自身のために自身の業によってきよめ、聖なるものとされ、その器を測り知ることのできない知恵によって指導し制御する<sup>38</sup>、と説明される。この場合には、誰一人として自分自身の力によってなされたものとして誇りうるものは何もなく、それでも「自身の善きわざによってではなく、神の恵みが神を信じる者に永遠の生命を約束することをよしとされたがゆえに、人は堅い信頼によって永遠の生命を望みうる」<sup>39</sup>と説明されている。それに対し人間の方でなすべきことは、「神がみ霊を保証し増し加えてくださるように不断に神に祈り、感謝し」<sup>40</sup>、また「私たちによって何かよきことがなしとげられたときは、私たちにおける神の力をあがめ」<sup>41</sup>、「いたるところで神の知恵を讃嘆し、いたるところで神の恵みを愛する」<sup>42</sup>ことであると言う<sup>43</sup>。この考え（‘単純な従順に陥っているキリスト教精神’）では、私たちからいっさいの高慢を取り除き、キリストにいっさいの名誉と信頼とを帰し、また私たちから人間と悪魔に対する恐れを払い落とし、かつ自分自身に不信を懐かせるが、私たちを神によって勇敢な者とする<sup>44</sup>、と解釈される。神に対する信仰がすべてである。

しかし、エラスムスはこの考えを一定程度の称赞・評価しながらも、同時にそれに違和感を持っている。その違和感をもたらす根本的な点は人間の「自由意志」を取り去る思想である。たとえば、エラスムスは「私たちの功績が無であって、あらゆるわざが、そう、敬虔な

<sup>31</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ13行目。

<sup>32</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ14行目。

<sup>33</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ13から14行目。

<sup>34</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ15行目。

<sup>35</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ15から16行目。

<sup>36</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ16から17行目。

<sup>37</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ17行目。

<sup>38</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ17から19行目参照。

<sup>39</sup> 前掲書『評論「自由意志」』76ページ19から77ページ2行目参照。

<sup>40</sup> 前掲書『評論「自由意志」』77ページ3から4行目。

<sup>41</sup> 前掲書『評論「自由意志」』77ページ4行目。

<sup>42</sup> 前掲書『評論「自由意志」』77ページ4から5行目。

<sup>43</sup> エラスムスは、このようにあらゆることに神の頼り、神の業であると信じ、神を賛美するこの考えを「キリストのみ霊によって生きかつ導かれている人々の信仰告白に対応しているもの」と理解している（前掲書『評論「自由意志」』77ページ8行目参照）。これは、人間からいっさいの高慢を取り除き、キリストにいっさいの名誉と信頼とを帰するものであるとエラスムスと言う。エラスムスはこの考え方を敬虔で好ましい命題として一定の評価はしている。

<sup>44</sup> 前掲書『評論「自由意志」』77ページ9から11行目参照。

人々のわざまでが、罪であるときくとき、また、私たちの意志は陶器を造る者の手中にある粘土が果たしている役割と同様な役割しか果たしえないと言われているのを聞くとき、あるいは私たちがなしたり欲したりすることはすべて絶対的必然性に帰せしめられると言われるのを聞くとき、私の心は多くの疑念をもってためつけられる<sup>45</sup>と言う。エラスムスは、欲したりすることが「絶対的必然性」であると言う説明に疑念をもち、同時に格別に敬虔な人の行いまでも罪であるとする思想に疑念を持っている。たとえば、『聖書』の中では、善き業に満ちた多く聖徒の正しい行い<sup>46</sup>が記述され、併せて神の命に服従する者の従順がほめられ、服従しない者の不従順が罰せられている<sup>47</sup>。エラスムスは「私たちには、私たちの意志によってなされるものは何一つなく、いっさいは単なる必然性によってなされるとすれば、どうして私たちは裁きの座に引き出されるのを余儀なくされるのであろうか<sup>48</sup>と懐疑的になる。さらに、私たちが自分自身で何もしないのなら、何のために多くの忠告や命令や脅迫や勧告や要求<sup>49</sup>が私たちに課されるのであろうかと疑問を提示する。また神が与えるか否かを決め、その決定を変更しないのであるならば、どうして神は絶えず祈り、集中し、また永遠の生命という賞品をもとめることを欲するのであろうか<sup>50</sup>と疑問を投じる。神は私たちにどうして多くの労苦をもって期待するのであろうか。実際に、神の恩恵は、私たちを打ち砕き、投げ出し、叱責をもって追い出し、拷問し、殺すことによって、打ち勝ち、凱旋している<sup>51</sup>。何故か、何の功績も帰せられず、永遠の生命を望んで自身の肉体を責苦に差し出した者(格別に敬虔な者)がかえって罪を犯した、と言われている。エラスムスの疑問は、「単純な従順に陥っているキリスト教精神」の思想における、神のあり方への疑問に進化している。「だが、どうして、極めて憐れみ深い神が、殉教者たちにおいてこのように振舞おうと欲したもうのであろうか。というのも、その友に無報酬で与えようと決心しながら、その人が絶望するまで、責めさいなまなければ与えようとしない人は、残酷な人に見えるからである<sup>52</sup>と疑問を提示する。エラスムスは、神の特性につて「本性上最善でありたもうから、彼が欲したもうことは何であれ、それは最善であるほかない<sup>53</sup>と自身に説き、自身の説得を試みるが、しかし、「敬虔な者における憐憫を誇張するあまり、他の者たちに対して神をほとんど残酷なかた

<sup>45</sup> 前掲書『評論「自由意志」』77ページ13から16行目。

<sup>46</sup> 前掲書『評論「自由意志」』77ページ17から19行目参照。

<sup>47</sup> 前掲書『評論「自由意志」』78ページ1行目参照。

<sup>48</sup> 前掲書『評論「自由意志」』78ページ3から4行目。

<sup>49</sup> 前掲書『評論「自由意志」』78ページ5から6行目参照。

<sup>50</sup> 前掲書『評論「自由意志」』78ページ7から8行目参照。

<sup>51</sup> 前掲書『評論「自由意志」』78ページ11から12行目参照。

<sup>52</sup> 前掲書『評論「自由意志」』78ページ14から17行目。

<sup>53</sup> 前掲書『評論「自由意志」』79ページ1から2行目。



にしようとしている人々が自分ではどんな具合につじつまを合わせているものやら私にはわからない<sup>54</sup>と嘆きの言葉を吐き出している。‘単純な従順に陥っているキリスト教精神’の思想を抱く人たちに攻撃の矢を射るエラスムスは、神が善をなすことを欲していない「他の人々に、永遠の刑罰を課されるということが、(憐憫にかなうものであうか、とは言わなまでも)、どうして正義にかなうのか説明することはむづかしいことである。なぜなら、これらの人たちが自分の力で何ら善をなすことができず、かつ彼らには全く「自由意志」がないか、あっても罪を犯すことしかなしえないというのであるから<sup>55</sup>と言う。

エラスムスは、‘単純な従順に陥っているキリスト教精神’の思想を譬え<sup>56</sup>によって分かりやすく解説している。エラスムスは主人と奴隷たちとの位置関係から解説している。主人が、「奴隷が背が低いとか、鼻が高すぎるとか、さもなければ姿があんまりよくないという理由で、彼を革紐でむち打ったとしたら、だれしもこの主人を残酷で不公平な人物だと判断するであろう<sup>57</sup>」とエラスムスは言い、かの奴隷にとってはどうすることもできないことのために、主人から罰せられているからである。この譬えで主人が神で、奴隷たちが私たち(人間)に置き換えて説明されると、奴隷の背丈が低いこと、鼻が高すぎることに、姿が佳くないことは神の業であるので、神自身がその奴隷の背丈を低く、鼻を高く、姿を醜く造っておきながら、その奴隷の身体的欠点<sup>58</sup>で奴隷を神が罰している。主人(神)は余りにも不公平であり残酷である。エラスムスは、この隠喩によって、‘単純な従順に陥っているキリスト教精神’の思想を批判している。また、エラスムスは、神の戒めについても主人と奴隷の関係で説明している。主人が足枷で穀物の搗碎機つくだきに縛りつけられている奴隷にいろいろなことを言いつけて、「あちらにいけ」、「これをせよ」、「走って行け」などと言い、従わないときには呪いの言葉を浴びせ脅す。そして、言うことに従わないといって鞭打ちの罰を課し、革紐で死ぬほど打ちつけたとしたら、奴隷は主人を残酷な人と言うであろう。この場合にも、奴隷(人間)を身動きできなく強制しておきながら、奴隷(人間)に主人(神)が「あちらにいけ」、「これをせよ」、「走って行け」と命じるのは、極悪非道であろう。エラスムスは、この隠喩によって、‘単純な従順に陥っているキリスト教精神’の思想を批判している。

エラスムスは、このような神に対する信仰と愛とを途方もなく誇張する‘単純な従順に陥っているキリスト教精神’の思想に批判的である。このキリスト教精神では、奴隷のように「か

<sup>54</sup> 前掲書『評論「自由意志」』79ページ6から7行目。

<sup>55</sup> 前掲書『評論「自由意志」』79ページ8から12行目。

<sup>56</sup> いかに取りあげる‘主人と奴隷の譬え’については、前掲書『評論「自由意志」』80ページ2から15行目参照。

<sup>57</sup> 前掲書『評論「自由意志」』80ページ4から6行目。

<sup>58</sup> 身体的欠点を持つ奴隷とは、善をなすことを欲していない人に対応している。

くも多くの冒瀆によって汚されているキリスト者の生活」<sup>59</sup>は、「私たちの冷淡で怠惰な信仰態度から生じる」<sup>60</sup>と反省し、そして「私たちは唇のうわつらをゆれているほんの言葉だけで神を信じている」と嘆いている。エラスムスは、この思想を抱くキリスト者に対して「信仰の讚美を大いならしめようと全力を尽くしつつも、意志決定の自由を否定することのないように用心すべきである」<sup>61</sup>と説得しようとしている。この思想を抱く人々は、「わざはすべて神に負うところのものであって、神なしには私たちは何ごともなしとげることはいできない。そして、「自由意志」が提供するものはごくわずかなものであって、しかも自由意志がごくわずかなものしか提供しないそのこと自身も神の賜物」<sup>62</sup>であるとすることによって、「自由意志」を「恩恵に協力するようにさせることができる」<sup>63</sup>と彼は思っている。

エラスムスは、この思想を抱いているキリスト教徒として聖アウグスティヌスとルターを挙げている。すでにはじめの脚注16で示したように、エラスムスは、聖アウグスティヌスについては「人間がおのれの力をたのみとすることが、いかに真の敬虔の破滅となるかということ熟考して見て、恩恵へ重きを置く方へ傾いている」と言っている。すなわち、聖アウグスティヌスは人間の「自由意志」を取り去っている<sup>64</sup>と理解している。また既に示したように、聖アウグスティヌスについて「罪のとりことなっている人間が、生活を匡正するために戻ってくることができることや、人間が自らを救いに導くような何事かをなしうるということを否定している」ともエラスムスは説明している。エラスムスは、人間の「自由意志」を否定することは「不公平な考え」<sup>65</sup>であると見なし、自由意志を拒む代表例として、「私たちがなすいっさいは、私たちの「自由意志」によって生じるのではなく、単なる必然性から生じる」<sup>66</sup>、また「むしろ『自由意志』は実際は虚構されたものであるか、あるいは実体のない名称であるか、のどちらかだと端的にいうべき」<sup>67</sup>というルターの主張を紹介している。ルターは、ウイクリフの考えに同調して、「ウイクリフの信条が正しく教えているように、いっ

<sup>59</sup> 前掲書『評論「自由意志」』80ページ17行目。

<sup>60</sup> 前掲書『評論「自由意志」』80ページ17から18行目。

<sup>61</sup> 前掲書『評論「自由意志」』81ページ6から7行目。

<sup>62</sup> 前掲書『評論「自由意志」』82ページ3から5行目。

<sup>63</sup> 前掲書『評論「自由意志」』82ページ5から6行目。

<sup>64</sup> アウグスティヌスは「神は私たちのうちに善悪ともに働きたまい、さらに彼が私たちのうちに働きたもうた善きわざに報い、わたしたちのうちにはたらきたもうた悪しきわざを罰したまう」ことが真実であると考えている。エラスムスはこのように理解している(前掲書『評論「自由意志」』12ページ1から3行目参照)。

<sup>65</sup> 前掲書『評論「自由意志」』82ページ8行目。なぜアウグスティヌスがこの極端な公理に陥ったかについては、エラスムスは、アウグスティヌスがペラギウスを念じ伏せようとしたため、「自由意志」に不公平な考えを抱くようになった、と見ている(前掲書『評論「自由意志」』82ページ7から8行目参照)。

<sup>66</sup> 前掲書『評論「自由意志」』11ページ17から18行目。

<sup>67</sup> 前掲書『評論「自由意志」』43ページ8から9行目。

さいは必然性から、絶対的に、生じる」<sup>68</sup>と主張している。ルターは、信仰がすべてであると見做して「聖者の功績も全く役に立たない、どんなに敬虔な人のわざであろうと、信仰と神の憐憫とが助けなければ、すべて永遠の刑罰へと運んで行くであろうところの罪にすぎない」と言い切っている。ルターの主張からは、人間の「自由意志」はいっさい取り去られることになる。

## 1.2 人間の「自由意志」を過大評価する見解

この見解の代表例としてエラスムスは『ベン・シラの知恵』（『集会書』）<sup>69</sup>第15章14から18節「神、はじめに人を造り、彼を自分自身のもくろみにおまかせになった。神はまた人に彼の命令と戒めを加えて言われた。『もしあなたが私の命令を守り、私の心にかなう信仰を絶えず保持していようと欲するなら、戒めはあなたを守るであろう』。神はまたあなたに水と火をおかれた。あなたは欲するときに、その上に手を差しのべることができる。また人の前には、生と死と、善と悪とがある。そしていずれでも気に入るものが彼にあたえられるであろう」<sup>70</sup>を引用している。この箇所では、最初の人アダムが善と悪（願望すべきことと避けるべきもの）とを区別する「毀損されない理性」<sup>71</sup>をもって創造されたことを明らかにしている。彼は「毀損されない意志」<sup>72</sup>を持っていた。そして「この意志は、欲すれば自ら善にそむいて悪へ迷い出ることが可能なほどであった」<sup>73</sup>と解釈している。しかし、エバにおいて意志が毀損されていたばかりでなく、善悪の泉が湧き出す理性も悟性も毀損されていた<sup>74</sup>と解釈できよう。アダムにおいては、エバの思惑を神の戒めよりも気づかったので「妻に対する度はずれた愛のゆえに、彼の意志が毀損された」<sup>75</sup>とエラスムスは説明している。それゆえに、意

<sup>68</sup> 前掲書『評論「自由意志」』43ページ10から11行目。またエラスムスは、ウイクリフの信条（教理）について「恩恵を受ける前にも受けた後でも、いっさいは、それが善であれ悪であれ、そして善悪に関係ないものまで、すべてが単なる必然性によって生じる」として説明している（前掲書『評論「自由意志」』43ページ3から4行目）。そしてルターはこの教理を承認しているとエラスムスは信じている。

<sup>69</sup> この書は、今日の『聖書』の正典には含まれていないが、中世には含まれていた。また何故エラスムスは、「自由意志」の起源とその効力を語るためにこの『集会書』によったのかというと、そのことが明瞭に書かれているかであろう。

<sup>70</sup> 前掲書『評論「自由意志」』20ページ4から7行目。

<sup>71</sup> 前掲書『評論「自由意志」』20ページ15から16行目参照。

<sup>72</sup> 前掲書『評論「自由意志」』20ページ16行目。エラスムスによると、この意志は、欲すれば善に背いて悪へ迷い出ることが可能なほどに自由である。エラスムスは、墜落天使において意志が深く毀損されたので天に立ち返ることができないと言い、墜落せずに留まった天使においては善き意志が強化された、と言っている（前掲書『評論「自由意志」』20ページ17から19行目参照）。

<sup>73</sup> 前掲書『評論「自由意志」』20ページ16から17行目。

<sup>74</sup> 前掲書『評論「自由意志」』21ページ4から5行目参照。蛇が生命の木の実を食らうと言われた主の脅迫がむなしなものだとエバは説得した。そしてエバがアダムに毀損された思惑を伝えたのである。

志から派生される理性（あるいは悟性）<sup>76</sup>も毀損されたものになったと解釈される。

この箇所から理解されるように、始め人間の意志は全く自由であったが、罪によってほろほろにされ、「選びとったり避けたりするものである意志は、自らの本性の援助では、自分をよりよき実りへと向け変えることができず、むしろ自由を失って、自らが一度すすんで同意した罪に、仕えざるをえなくなるという程度まで、悪化せしめられている」<sup>77</sup>が、しかし「毀損された意志」は神の恩恵によってある程度は罪を許される、とエラスムスは言いたいのであろう。その程度は、ペラギウス<sup>78</sup>の徒の見解によれば、新しい恩恵の助けがなくとも、永遠の生命を手に入れることができるほどまでである<sup>79</sup>。よって、罪を許す恩恵は、ある程度まで私たちを助けるが、その罪を根絶しうるには至らない<sup>80</sup>とエラスムスは説明する。ペラギウスは、「人間の意志が一度恩恵によって解放されきよめられれば、それ以上に新たな恩恵が必要とせず、自由意志の助けによって永遠の生命に到達しうる」<sup>81</sup>と考えている。それでも、人間の救済は神に負うものであって神の恩恵がなければ人間の意志は善に対して自由ではなかったとペラギウスは教えている<sup>82</sup>、とエラスムスは理解している。

またペラギウス（pelagius（354年生-426年あるいは440年没））と同様に人間の「自由意志」を強く説いているスコトゥス派の人々をエラスムスはあげている。この人々の見解を「自由意志の力は、人間がいまだ罪を滅ぼす恩恵を受けていなくとも、本性の力によって、彼らの言うところによれば、道徳的な善なるわざを行うことができ」、「神意にかなわしめる恩恵に値しうるものだと信じていた」<sup>83</sup>と説明している。

## 第2節 神の恩恵

### 2.1 神の恩恵の定義と三種の恩恵

恩恵とは値なしに与えられた寵愛を意味する。エラスムスは恩恵を3種に分解している。それは、第一に自然的恩恵（自然的影響<sup>84</sup>）であり、第二に勵起的恩恵<sup>85</sup>あるいは先行的恩

<sup>75</sup> 前掲書『評論「自由意志」』21ページ7行目。

<sup>76</sup> エラスムスは、理性（ロゴス）あるいは知性（ヌース）は罪によってほろほろにされたが、消滅はされていないと想定している（前掲書『評論「自由意志」』21ページ10から12行目参照）。

<sup>77</sup> 前掲書『評論「自由意志」』21ページ12から14行目。

<sup>78</sup> エラスムスは、人間の「自由意志」を過大評価する代表者としてペラギウスを挙げている。

<sup>79</sup> エラスムスによると、正統派の人々の説では、神の恩恵の助けによって正しい状態は保たれるが、一度犯した罪の痕跡は消えないので、子孫に罪が伝えられるように、罪への傾向はすべての者に移されることになる（前掲書『評論「自由意志」』22ページ18から24ページ2行目参照）。

<sup>80</sup> 前掲書『評論「自由意志」』22ページ1から2行目参照。

<sup>81</sup> 前掲書『評論「自由意志」』24ページ16から17行目。

<sup>82</sup> 前掲書『評論「自由意志」』24ページ17から18行目参照。

<sup>83</sup> 前掲書『評論「自由意志」』25ページ1から4行目。

恵<sup>86</sup>あるいは能動的恩恵<sup>87</sup>であり、第三に協力的恩恵<sup>88</sup>に分解される。これらは同じ恩恵であるが、その作用の仕方によって仕分けられる。第一のものが刺激し、第二のものが促進し、第三のものが完成するのである。聖アウグスティヌスは、聖霊のより豊かな賜物によって信仰に加えられた愛を協力的恩恵と呼んでいる。これは、努力する人々が得ようと務めているものを得るに至るまで、これらの人々を助ける<sup>89</sup>ことを意味している。以下では、それぞれの恩恵をより詳しく説明することにしよう。

第一の恩恵は、本性に具わっているもので、罪によって毀損されているが、絶滅させられていないものである。これをある人々は「自然的影響」と呼んでいる。この恩恵はすべての人々に共通である<sup>90</sup>ように与えられる。人間が善き業をなすためには、この「自然的影響」だけではなしえなく、第二の恩恵が必要になる。これをエラスムスは「特別な恩恵」(*gratia specularis*)<sup>91</sup>と言っているが、この恩恵によって罪人を改心へと刺激する。改心するように刺激された人は自分自身を嫌うようになる。そして彼は、罪を犯そうとする衝動を抑えるために、祈りそして説教を聞き、あるいは道徳的な善き行いによって、神の最高の恩恵の志願者でもあるかのように振る舞う。この恩恵は、各自の意志決定のうちに残されたものをより善い生活へと招いているが、「決して強制はしていない神の助けに全力を尽くして適合」<sup>92</sup>させることを可能にしているとエラスムスは説明する。従って、エラスムスは「私たちの意志を恩恵の方に向けるのもそらせるのも、私たちの意志決定のうちにある」<sup>93</sup>と理解し、神の恩恵に向かう人間の意志(「自由意志」)を強調している。そして、人間に対する神の無限の愛(神の協力的恩恵)が人々を‘神意にかなうものにする恩恵’をもってなすが、それでも人間が失敗することもあるので、いかなる罪人も自己に確実なことをなしえないかも知れないが、それでも自己に絶望すべきではなく、何人も自身の咎による以外は滅びないのである<sup>94</sup>。

最後に、人々の意志を活動的にし、その意志を完成に導く恩恵がある。この恩恵が聖アウ

<sup>84</sup> 自然的影響は、*influxus naturalis* の訳である。

<sup>85</sup> 励起的恩恵は、*gratia exstimulans* の訳である。

<sup>86</sup> 先行的恩恵は、*gratia praeveniens* の訳である。

<sup>87</sup> 能動的恩恵は、*gratia operans* の訳である。

<sup>88</sup> 協力的恩恵は、*gratia cooperans* の訳である。

<sup>89</sup> 前掲書『評論「自由意志」』26ページ2から3行目参照。

<sup>90</sup> この恩恵の具体例は、語ること、座ること、立ち上がる、助けること、読むこと、説教することなど。すべての人々に共通しているので、恩恵とは呼ばれていない。

<sup>91</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ2行目。

<sup>92</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ11行目。

<sup>93</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ11から12行目。

<sup>94</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ14から18行目参照。

グスティヌスによって「協力的恩恵」と呼ばれたが、エラスムスは神の恩恵が人々に働きかけ、「なんびともおのれの咎による以外は滅びることはない」<sup>95</sup>と説いている。聖アウグスティヌスたちは、「特別な恩恵」(能動的恩恵・励起的恩恵ならびに協力的恩恵)がなければ、人間は善いことをできないと考えている、とエラスムスは説明している<sup>96</sup>。すなわち、聖アウグスティヌスたちは「神の恩恵の主導的な絶え間ない助けがなければ、人間は善きわざを開始し継続し、完成することができないとしている」<sup>97</sup>とエラスムスは説明している。また聖アウグスティヌスたちの見解をエラスムスは「自由意志」は罪を犯すよりほかに何事もなしえず、ただ恩恵のみが私たちのうちに善きわざを働かせるのであって、それも「自由意志」によってあるいはまた「自由意志」をもって働くというのではなく、むしろ「自由意志」のうちに働く」<sup>98</sup>と説明している。よって聖アウグスティヌスたちは「生起するいっさいは単なる必然性によって生じる」<sup>99</sup>という見解に達している。すなわち、彼らの見解では、「自由意志」は名ばかりであり、「何事もなしえない」<sup>100</sup>となる。エラスムスは、聖アウグスティヌスの見解には全面的には賛同してはいない。エラスムスは人間の「自由意志」の働きに希望を持っている。

ベラギウスや聖アウグスティヌスにおいて、神の恩恵と人間の「自由意志」との位置関係(力関係)について簡単に解説しておこう。ベラギウスについては、本章第1節1.2においてすでに説明したが、繰り返すならば、ベラギウスは、一度恩恵によって罪から解放され、きよめられると、新しい恩恵の助けがなくとも、永遠の生命を手に入れることができるほどまでに人間の「自由意志」に期待し希望を寄せている。しかし、罪を許す恩恵は、ある程度まで私たちを助けるが、その罪を根絶するまでには至らないと彼は考えている。何故それほどまでに人間の「自由意志」に気持ちを寄せるのかというと、多分、ベラギウスは、人々を日常生活において努力と希望へと鼓舞し、人々を絶望させることを避け、同時に人々が安心して慢心することを避けようとしたのではないかと思われる。

それに対しベラギウスと距離を置いている人々は、人間の「自由意志」よりも神の恩恵に多くを帰している。しかし、その人々も「自由意志」からすべてを取りあげてはいないとエラスムスは希望を持っている。すなわち、先に「特別な恩恵」として位置づけたところの能動的恩恵・先行的恩恵・励起的恩恵あるいは協力的恩恵がなければ、人間がなんらかの善を

<sup>95</sup> 前掲書『評論「自由意志」』27ページ17から18行目。

<sup>96</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ6から7行目参照。

<sup>97</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ7から8行目。

<sup>98</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ10から12行目。

<sup>99</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ19行目。

<sup>100</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ16から17行目参照。

欲することができなるとし、神の恩恵によって絶え間なく導かれずと人間は善き業を始め、継続し、完成することができずとしている<sup>101</sup>。この見解について「人間に熱心と努力とをのこしているが、おのれの力に帰せられるようなものは何も残していない」<sup>102</sup>とエラスムスは説明している。エラスムスはこの見解に疑問を感じている。エラスムスは、この見解を彫刻家の手中にあって工人の意のままに形を変えられる蠟の役割を「自由意志」とみている見解<sup>103</sup>と説明している。蠟はすべて彫刻家の意のままに組み替えられる素材にすぎなく、蠟が彫刻家にその意志を伝えることはできない。蠟に残されていることは、祈ることが残されているだけである。

上の二つの見解はエラスムスが言うように極論である。それではエラスムスは人間の「自由意志」と神の恩恵の位置関係（力関係）をどのように考えていたのであろうか。エラスムスは、神の恩恵に過大な業を帰する人々に反論をする姿勢を取っている。エラスムスは、それらの人々については「功績とか人間わざというものへ信頼することに、あまりにも大なる恐れをいだいている」<sup>104</sup>とか、あるいは「自由意志」とはむなし名称であって、天使や、アダムや、私たちにおいて、また恩恵をうける以前にも、以後にも、それは何事もなしえなかったし、また何事もなしえない。むしろ、神が、私たちのうちに、善と同様に悪をも働かたもうのであって、生起するいっさいは単なる必然性によって生じるとする<sup>105</sup>と見做している人々と規定している。エラスムスはウイクリフやルターの見解には賛同してはいないが、それでも彼らの見解を完全には否定していない。

もしすべてがルターやウイクリフが言うように「必然性」から生じているのであれば、人間には選択の自由はあり得ないことになる。エラスムスは、『聖書』において、神は人々に選択を迫っていて、このことは人間に「自由意志」が具わっていることの証左であると考えている。エラスムスは、使徒パウロの『テモテへの第二の手紙』第3章16節「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのには有益である」<sup>106</sup>を引用し、『聖書』においては人間の「自由意志」が取り去られてはならないことの証左としている。もし一切が「必然性」に基づくのであれば、この使徒パウロの「人を教え」、「戒め」、「正しくし」、「義に導く」という言葉は存在しなくてもよいことになる。必然であれば、神は人に教える必要はないし、戒める必要もないし、正しくし義に導く必要もないであ

<sup>101</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ6から8行目参照。

<sup>102</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ9行目。

<sup>103</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ10から13行目参照。

<sup>104</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ13から14行目。

<sup>105</sup> 前掲書『評論「自由意志」』28ページ16から18行目。

<sup>106</sup> 前掲書『評論「自由意志」』42ページ16から17行目。

ろう。何故、神はその言葉を必要としたのであろうか。それらの言葉は、神が人に働きかけることを意味している。人を神意にかなう者にするように神の恩恵を賜っている。また『聖書』において、それらの言葉以外にしばしば使用される、神が人と約束する、人を脅迫する、人に諫告する、人を非難する、さらに人に嘆願する、人を祝福する、人を呪詛するなどの言葉も、もし一切が「必然性」に基づくのであれば、不必要である、とエラスムスは言う。

## 2.2 人間の「自由意志」と神の恩恵の関係

ここでは、エラスムスにそって実際に引用している聖書の箇所に触れながら人間の「自由意志」(liberum arbitrium)と神の恩恵の関係について考察してみよう。エラスムスが引用しているすべての聖句に言及することはできないが、主な点についての引用文を参照しながら両者の関係を考察し検討して見よう。

『創世記』第4章6から7節において、主はカインに「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔をふせるのです。正しいことをしているのですしたら、顔をあげたらいいでしょう。もし正しい事をしていないのですしたら、罪の門口が待ち伏せています。それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません」<sup>107</sup>と言った。ここで主である神は、カインに不道徳な行為へ向かうことを抑えることができると語っている。神はカインに義か罪かについて‘選択する’ことができると語っている。決して神はカインが必然的に罪を犯すとは言っていない。カインには‘選択する’かしないかの意志の力があると言い、これがカインの「自由意志」である。

『申命記』第30章15節において、主はモーセに「わたしは、きょう、命とさいわい、および死と災をあなたの前に置いた」と言って、その16節で「きょう、あなたにあなたの神、主を愛し、その道に歩み、その戒めと定めと、おきてとを守ることを命じる。それに従うならば、あなたは生きながらえ、その数は多くなるであろう」と言い、その17節で「しかし、もしあなたが心をそむけて聞き従わず、誘われて他の神々を拝み、それに仕えるならば」、その18節で「あなたがたは必ず滅びるであろう」と言っている。このように、主である神はモーセとイスラエルの民に‘戒めに従う’か従わないか、あるいは幸いと災いの選択を迫っている。この‘選択する’意志力がカインの場合と同様にモーセとイスラエルの民にある。これはモーセやイスラエルの民の「自由意志」である。

エラスムスは、選択や決心や戒めや離反などの言葉が『聖書』で使用されるが、もし人間に善をなす自由がなく、悪をなすしかできないとしたならば、これらを神が語ることはあり得ないであろう。そのように語るのは不合理であろう。『申命記』第30章10節に「あなたが、

---

<sup>107</sup> 前掲書『評論「自由意志」』29ページ11から13行目参照。



あなたの神、主の声に聞きしたが、この法律の書にしるされた戒めと定めとを守り、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主に帰する」<sup>108</sup> ことによってイスラエルは栄えるとある。ここでは、「聞き従う」とか、戒めや掟を「守る」、イスラエルの神に「帰する」とかの言葉が使用されているが、これらもイスラエルの民の「自由意志」である。というのは、イスラエルの民は聞き従わなくともよし、戒めを守らなくともよし、他の神に走ってもいいのであるから。また『エゼキエル書』第18章21節に「悪人がもしその行ったもろもろの罪から離れ、わたしのすべての定めを守り、公道と正義とを行ふならば、彼は必ず生きる」<sup>109</sup> とある。ここでも「離れ」とか「行ふ」が使用されている。これも「自由意志」の表れである。というのは、イスラエルの民が罪を犯し、正義をないがしろにすることもできるのであるからである。また同章23から24節に「むしろ彼がそのおこないを離れて生きることを好んでいるではないか。義人がもしその義を離れて悪を行い、悪人のなすもろもろの憎むべき事をおこなうならば、生きるであろうか。彼が行ったもろもろの正しい事は覚えられない。彼はその犯したとがと、その犯した罪とのために死ぬ」<sup>110</sup> とある。ここで使用されている「行い」、「行った」、あるいは「離れ」<sup>111</sup> などの言葉も人間の「自由意志」を示している。『聖書』のその他の多くの箇所にて<sup>112</sup> 人間の「自由意志」が作用している証拠を見つけることは可能である。

実際、『聖書』では「回心と、熱心とより善きものへの努力以外のものは意味していない」<sup>113</sup> とエラスムスは言う。「自由意志」が一切ないのであれば、「自らをよきものへ向ける者、あるいは自らをよりよきものへ向けることを拒絶する者に向けられた」<sup>114</sup> 脅迫や非難や約束や諫告、さらに嘆願や祝福や呪詛もまた不要になる。何かをするとか、あるいは何かを拒むなどを示す表現であるが、『詩篇』第81篇13節に「わたしはわが民のわたしに聞き従い、イスラエルのわが道に歩むことを欲する」<sup>115</sup> とある。『詩篇』第34篇12から13節に「さいわ

<sup>108</sup> 前掲書『評論「自由意志」』34ページ2から5行目参照。

<sup>109</sup> 前掲書『評論「自由意志」』31ページ14から15行目。

<sup>110</sup> 前掲書『評論「自由意志」』31ページ15から18行目。また『エゼキエル書』第18章31節に「あなたがたがわたしに対しておこなったすべてのとがを捨て去り、新しい心と、新しい霊とをえよ」とある。ここで「捨て去り」にも人間の「自由意志」が表されていると考えられる。

<sup>111</sup> 『エゼキエル書』第33章11節に「わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ」とある。この「離れて」にも人間の「自由意志」が表されている。

<sup>112</sup> 『ヨナ書』第2章12節に「悲しみをもってわたしに帰れ」とある。この「帰れ」も「自由意志」を表している。『ヨナ書』第3章7節に「その悪い道およびその手にある強暴を離れよ」とある。この「離れ」も「自由意志」である。『エレミヤ書』第26章3節に「彼らが聞いて、おのおのその悪い道を離れることがあるかも知れない。そのとき、わたしは彼らの行いの悪いために、災いを彼らに下そうとしたのを思いなおす」とある。ここの「離れ」や「行い」も「自由意志」を表している。

<sup>113</sup> 前掲書『評論「自由意志」』32ページ12から13行目。

<sup>114</sup> 前掲書『評論「自由意志」』32ページ19行目参照。

いを見ようとして、いのちを慕い、ながらえることを好む人はだれか。あなたの舌をおさえて悪を言わず、あなたのくちびるをおさえて偽りをいわすな」と詠まれている。これらも人間の「自由意志」を表している。

神の可変性についてエラスムスは考察している。たとえば、『エレミヤ書』第18章8節に「もしわたしの言った国がその悪を離れるならば、わたしはこれに災いを下そうとしたことを思いなおす」<sup>116</sup>とある。実際、神は全知であるので、一旦決めたことを変える(可変する)ことは不合理である。それでは、この『エレミヤ書』における神の言葉はどのように解釈する必要があるのであろうか。それは、神の語った国(イスラエルあるいはユダ)が改心し、神の恩恵に値するときには、神はその国に対する怒りを抑え、その国に好意を示すと解釈される<sup>117</sup>。また『サムエル記(下)』第12章10節に「あなたがわたしを軽んじてヘテびとウリヤの妻をとり、自分の妻にしたので、つるぎはいつまでもあなたの家をはなれないであろう」とある。これはモーセの戒めに反するので、神は怒った。しかし、ダビデがナタン<sup>118</sup>に「わたしは主に罪をおかしました」<sup>119</sup>と言い、「主もまたあなたの罪を除かれました。あなたは死ぬことはないでしょう」<sup>120</sup>と言った。このように神が変わったように捉えられるように見えるが、実際にはダビデが改心(回心)したのである。変わったのはダビデの意志であったと思われる。その改心に対して、神が神の恩恵に値すとされたので、ダビデは死に至る罪<sup>121</sup>を許されたのである。もしダビデが必然的に罪を犯しているのであれば、神自身が決めていることであるから、ダビデにどうして罪を帰せることができようか。

ここまでは、旧約聖書からの引用であったが、新約聖書から人間の「自由意志」と神の恩恵の関係に係わる部分を多少引用しよう。『マタイによる福音書』第19章17節に「もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい」<sup>122</sup>とある。これはイエスによるある人への返答であるが、永遠の生命を得ることを欲するなら、戒めを‘守る’ように勧めている<sup>123</sup>。実際

<sup>115</sup> 前掲書『評論「自由意志」』32ページ14から15行目

<sup>116</sup> この直ぐ後に、エレミヤは「もしその国がわたしの目に悪と見えることを行い、わたしの声に聞き従わないなら、わたしはこれに幸を与えようとしたことを思い返す」と主の言葉を続けている。

<sup>117</sup> 前掲書『評論「自由意志」』34ページ14から17行目参照。

<sup>118</sup> ナタン(Nathan)は、ダビデの宮廷で重用された預言者であった(『聖書辞典』331ページ)。

<sup>119</sup> 『サムエル記(下)』第12章13節。また前掲書『評論「自由意志」』35ページ2行目参照。

<sup>120</sup> 『サムエル記(下)』第12章13節。また前掲書『評論「自由意志」』35ページ2から3行目参照。

<sup>121</sup> ダビデは死に至る罪は許されたが、その14節に「あなたはこの行いによって大いに主を侮ったので、あなたに生れる子供はかならず死ぬでしょう」とある。ダビデはその子の犠牲によって死を回避している。

<sup>122</sup> 前掲書『評論「自由意志」』36ページ2行目参照。

<sup>123</sup> 『マタイによる福音書』第19章21節に「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう」とある。完全になることを欲するなら、持ち物売り払うことになるが、売り払うか否かは、その人の「自由意志」である。

に、戒めを‘守る’か否かは、その人の「自由意志」である。また『ルカによる福音書』第9章23節に「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」<sup>124</sup>とある。イエスについてくることを欲するなら、自分を‘捨て’、そして‘従って’来なさいと説いている<sup>125</sup>。これらの言葉も人間の「自由意志」を表している。ここで一切が「必然性」であったら、これらの戒めは不必要になる。また『ヨハネによる福音書』第15章7節に「あなたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めなさい」とある。ここで‘…ならば’は、全く「必然性」とは馴染まない。この表現は、人間の「自由意志」の証左である。

神の恩恵の一端である報償と「自由意志」の関係を見てみよう。どうして神は報償を人に給うのであろうか。すべての人が報償を与えられている訳ではない。報償は人の業に対して与えられるのであるから、これは人の功績に対する褒美であると解釈することができる。逆に怠惰な怠け者は罰せられる。『マタイによる福音書』第25章14から30節において、天国(神の国)について、勤勉な者はその勤勉の報酬として褒美が与えられるが、怠惰な者は罰せられ、その持っている物まで取りあげられる、というイエスによる譬え話がある。勤勉な僕に主人は「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んだ」<sup>126</sup>と語ったが、怠惰な僕には主人は「悪い怠惰な僕よ」と言って、「さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラント持っている者にやりなさい」<sup>127</sup>と語った。ここでは、何故、主人によって勤勉な僕が称賛され怠惰な僕が罰せられているのであろうか。ここに人としての「自由意志」が働いていると思われる。怠惰にするか勤勉にするかは人間の「自由意志」である。また『マタイによる福音書』第25章35から36節に「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいているときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである」とある。この人たちをイエスは御国に招いている。これはイエスの報償である。この報償にあずかる人々は、勤勉であることがもとめられる。勤勉にするか、あるいは怠惰にするかは人の「自由意志」である。『福音書』にも「自由意志」を述べている箇所が多々ある<sup>128</sup>が、『福音書』の譬えは「私たちが神の恩恵をないがしろにして

<sup>124</sup> 前掲書『評論「自由意志」』36ページ4から5行目参照。

<sup>125</sup> 何故このように厳しい戒めをイエスは課しているのであろうか。それは、その24節に「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう」からであろう。

<sup>126</sup> 『マタイによる福音書』第25章21から23節参照。

<sup>127</sup> 『マタイによる福音書』第25章24から28節参照。ここでタラントとは、貨幣の計算単位であり、通貨ではない。新約の頃では、1タラント単位の貨幣の金額は6,000ドラクメに相当する。1ドラクメは1日の賃金相当であった。1タラントはローマ銀貨の数千デナリオンに相当している。

<sup>128</sup> たとえば、『マタイによる福音書』第5章12節に「喜び、よろこべ、天においてあなたがたがのける報い

滅び行くことがないように、私たちが努力や勤勉や熱心へと鼓舞する」<sup>129</sup>とエラスムスは説明している。

次には、使徒の言葉・行いから引用してみよう。エラスムスは、使徒パウロの手紙から引用し、「必然性」と人間の「自由意志」についての関係を考察し検討している。『ローマ人への手紙』第2章2節に「わたしたちは、神のさばきが、このような事を行う者どもの上に正しく下ることを、知っている」<sup>130</sup>とある。ここでこのようなことを‘行う’とあるが、これは人間の「自由意志」を表している。『ローマ人への手紙』第2章4節に「それとも、神の慈愛があなたを悔改めに導くことを知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか」<sup>131</sup>とある。悔い改めに導かれ回心するのは人間であるので、これは人間の「自由意志」がある。もし「自由意志」がないならば、戒めを軽蔑する責任は人間に帰せられることはないであろう。その責任は創造主である神に課される。『ローマ人への手紙』第2章5から6節に「あなたのかたくなな、悔改めのない心のゆえに、あなたは、神の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる」<sup>132</sup>とある。頑なにしているのは、神か人間自身かのいずれでも有り得る。しかし、悔い改めないのは人間であり、ここでは人間の「自由意志」が働いていると思われる。罪を悔い改めずに神の怒りを積むところにも人間の「自由意志」が働いている。もし神が私たちが善に帰するように導いたその結果として私たちが栄光、名誉、永年の生命を獲得してとすれば、それはすべて神の恩恵によることになる。しかし、実際には、神は各々の業に応じて報償をもたらすのであるから、間違いなく、人間の行いに「自由意志」が働いていると使徒パウロは考えている。

『コリント人への第一の手紙』第9章24節に「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい」<sup>133</sup>とある。その25節には「彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしは

---

は大きい」とある。『マタイによる福音書』第11章28節に「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」とある。『マタイによる福音書』第24章42節に「だから、目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか、あなたがたにはわからないからである」とある。『マタイによる福音書』第5章44節「しかし、わたしはあなたがたに言う、敵を愛し、迫害する者のために祈れ」とある。『マタイによる福音書』第7章7から8節に「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだせ、門をたたく者は開けてもらえるからである」とある。

<sup>129</sup> 前掲書『評論「自由意志」』37ページ14から15行目。

<sup>130</sup> 前掲書『評論「自由意志」』38ページ18から19行参照。

<sup>131</sup> 前掲書『評論「自由意志」』38ページ15行参照。

<sup>132</sup> 前掲書『評論「自由意志」』39ページ3から5行目参照。

<sup>133</sup> 前掲書『評論「自由意志」』39ページ13から14行目参照。

朽ちない冠を得るためにそうするのである」<sup>134</sup>とある。この手紙では、キリストと共に戦う者に勝利の冠（名誉）が与えられるが、戦わぬ者には冠は与えられない。ここで‘走る’かあるいは‘走らない’かの選択が戦士に与えられている。この意味で戦士には「自由意志」があることになる。またエラスムスは「戦いのあるところ、そこには意図的な努力がある」<sup>135</sup>と言って、‘戦いをする’かあるいは‘しない’かの選択が可能になるので、これは人間の「自由意志」を表している。『テモテへの第一の手紙』第8章11から12節に「そして、義と信心と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい」<sup>136</sup>とある。使徒パウロにとって、戦いの冠は永遠の生命であって、朽ちることのない賞品（名誉）である。

『テモテへの第二の手紙』第2章3節に「キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみをもとにしてほしい」<sup>137</sup>とあり、つまり、彼はキリストを頭として戦うことになる。ここで苦しみを共にするか、あるいは共にしないかは、使徒パウロの愛する子テモテの「自由意志」である。その5節に「競技をするにしても、規定に従って競技をしなければ、栄冠は得られない」、さらにその6節に「労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである」とある。ここで、農夫の報償は生産物の分配であるが、キリストの戦士の報酬は冠であり、名誉である。『テモテへの第二の手紙』第4章7節に「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」<sup>138</sup>とあり、その8節に「今や義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう」<sup>139</sup>とある。エラスムスは、戦うという言葉に「必然性」と結びつけるのは困難であると言っている。戦うか戦わないかの選択は、人間の「自由意志」である。

### 2.3 人間の「自由意志」も神の恩恵も

「人間が何事もなしえないとすれば、どうして使徒は「なすべし」というのであろうか。もし人間が何事かをなすとすれば、どうして彼は神が「すべてのもののうちに働いてすべてのことをなさる」というのであるか」<sup>140</sup>とエラスムスは自問している。エラスムスは「人間がいっさいをなすのなら、恩恵の余地はありえないであろう」<sup>141</sup>と言い、また「人間が何事もな

<sup>134</sup> 前掲書『評論「自由意志」』39ページ14行目参照。

<sup>135</sup> 前掲書『評論「自由意志」』39ページ17から18行目。

<sup>136</sup> 前掲書『評論「自由意志」』39ページ17行目参照。

<sup>137</sup> 前掲書『評論「自由意志」』40ページ1行目参照。

<sup>138</sup> 前掲書『評論「自由意志」』40ページ3から4行目参照。

<sup>139</sup> 前掲書『評論「自由意志」』40ページ4行目参照。

<sup>140</sup> 前掲書『評論「自由意志」』56ページ17から19行目。

<sup>141</sup> 前掲書『評論「自由意志」』57ページ3から4行目。

さないのであれば、功績や失行の余地は存在しないであろう。功績や失行に余地が存在しない場合には、刑罰の余地も報償の余地も存在しないであろう<sup>142</sup>と言う。エラスムスは両方の解釈が有り得るという見解を示している。使徒パウロは『ピリピ人への手紙』第2章12節において「いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい」と言い、人間に何かをすることを求めているが、他方では『コリント人への第一の手紙』第12章6節において「すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである」と言い、神がすべてを行うと述べている。使徒パウロも、「神の意志」がすべてをなすと言いながら、他方では人間に何事かをなすことを要求している。

『聖書』の句からではいずれの極端な解釈も可能になるので、「必然性がすべてであると考え「自由意志」を取り除こうとする解釈者は、エラスムスによると、「あなたの欲するところのものへあなたの手をのばせ」というところを「恩恵が欲するところのものへと恩恵があなたの手をのばさせる」ことである<sup>143</sup>と説明する。ここで「あなたの欲するところのものへあなたの手をのばせ」という箇所は、人間の「自由意志」に対応する箇所である。これを「神の意志」と理解するとき、「恩恵が欲するところのものへと恩恵があなたの手をのばさせる」と表現される。また「あなたがたは新しい心を得よ」は「神の恩恵があなたがたのうちに新しい心をつくる」こと<sup>144</sup>と同様に説明することもできる。

エラスムスは、神の恩恵をもって「神の意志」と位置づけている。すべてが「神の意志」であると解釈するのが極論であると同様に、すべての業が人間の「自由意志」によると解釈するのも極論であるとエラスムスは考えている。エラスムスは、極論を避け、両者の考えを和合・和解させることを試みる。エラスムスは、両者の極論も「もしわたしたちが私たちの意志の努力を神の恩恵の助けに結びつけさせれば、容易に一致にもたすことができるであろう<sup>145</sup>と結んでいる。

### 第3節 今日の経済学における自由意志

#### 3.1 人間の普遍的な行動原理と社会状態

今日の経済学では、人が自由意志によって生産物（財あるいはサービス）を選択していることを想定して需要や消費選択を説明している。神の恩恵がいくにも働いていないかのよう<sup>146</sup>に説明している。経済学では神の力が働くことのない状態を想定していると考えられる。経済学が対象にする人間は自然状態<sup>146</sup>で生活している人間ではない。自然状態における自

<sup>142</sup> 前掲書『評論「自由意志」』57ページ2から3行目。

<sup>143</sup> 前掲書『評論「自由意志」』57ページ6から8行目。

<sup>144</sup> 前掲書『評論「自由意志」』57ページ8から9行目。

<sup>145</sup> 前掲書『評論「自由意志」』58ページ2から3行目。

然の権利及び自然の法則のもとでは、人間は「争ひをも、憎しみをも、怒りをも、欺瞞をも、約言すれば凡そ衝動がそゝるいかなることも拒否しないのである」<sup>147</sup>。またその自然状態の下では「人間の眞の利益と維持とをのみ意圖する人間的理性の諸法則に依つては制約され」<sup>148</sup>ないことを許すことになる。そのために経済学では、自然状態ではなく理性に制約された人間の行動<sup>149</sup>を前提にする。エラスムスとの関係で説明すると、人間の「自由意志」で満ちている状態での人間行動を経済学は表現している。

前節まで見てきた『聖書』では、すでに知られているように、律法（たとえばモーセの十戒など）によって人間が導かれその行為・行動が想定されている。たとえば、モーセの十戒の中には、父母を敬うこと、人殺しをしないこと、姦淫をしないこと、盗まぬこと、偽証しないこと、隣人の家をむさばらぬことなど<sup>150</sup>がある。これらは人間が安全で幸福な社会・経済状態を保つために導入された神の命令（あるいは神の法）であると理解されるが、実際に、今日の日本憲法や幾多の法律においても普遍的な人間の本性に沿って<sup>151</sup>人間行為・行動に関する規定が盛り込まれているのも事実である。すなわち、『聖書』の『創世記』のアダムやイサクやヤコブあるいはモーセ時代のイスラエルの人々と現代人（現代の日本人）とに普遍的に共通する行為・行動原理がモーセの十戒や日本の憲法などには載せられている面もあると考えられる。

そのような行動原理の一つとして隣人愛が挙げられる。『レビ記』第19章18節に「あなたは自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」とあり、その第19章34節に「あな

<sup>146</sup> スピノザ著（畠中尚志訳）『神学・政治論—聖書の批判と言論の自由—』（下）165ページ15から166ページ7行目に「實際すべて人間が理性の諸規則・諸法則に従つて行動すべく自然から決定されてゐるわけではないのである。むしろ反對に、すべての人間は全く無智の状態で生まれるのであり、そして彼らが眞の生活方法を知り又有徳の状態を勝ち得るまでには生涯の大部分（たとえ彼らがうまく教育された場合でも）が経過する、だがそれに拘わらず彼らはそれまでの間生活し、且つ自己を出來得る限り維持せねばならないのであり、そしてそれを欲望の衝動のみに従つてせねばならぬのである、自然は彼らに對して他の何物をも與なかつたし、又健全な理性に従つて生活する實際の力を拒んだのであるから」とある。自然状態では、人間は無智（無知）で、欲望の衝動に従つて行動している。

<sup>147</sup> 上掲書『神学・政治論—聖書の批判と言論の自由—』（下）167ページ3から5行目。

<sup>148</sup> 上掲書『神学・政治論—聖書の批判と言論の自由—』（下）167ページ5から6行目。

<sup>149</sup> ロレンツォ・ヴァッラ著（近藤恒一訳）『快樂について』（第1巻 ストア主義讚美とエピクロス主義讚美）40ページ10から15行目に「われわれは理性をそなえており、理性のおかげで不死なる神々の仲間ですが、そのようなわれわれにとって唯一の善は高潔の徳であり、唯一の悪は悪徳です。それなのに、どうしてわれわれは美徳を避け、そして悪徳をのぞみ、愛するのでしょうか。道をまちがえ、転落し、なんらかの期待によってかりたてられること（これも悪徳の一部ですけど）、これは罪そのものを楽しむこととは別です」とある。このことを本稿でも想定している。理性（あるいは神の力、神の恩恵）によって悪徳が事前に回避されている。

<sup>150</sup> 『出エジプト記』第20章12から17節。また同様に『申命記』第5章17から21節。

<sup>151</sup> 最高善を求めることが人間の普遍的な本性である。この本性は、全人類に共通しているを仮定される。

たがたと共にいる寄留の他国人を、あなたがたと同じ国に生まれた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなければならない」とある。また『マタイによる福音書』第22章39節にイエスの言葉として「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」と記述され、『ルカによる福音書』第10章25節にもこれと全く同じ文言が記述され、さらに『ルカによる福音書』第6章27節に「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろう者を祝福し、辱める者のために祈れ。あなたの頬を打つ者にはほかの頬をもむけてやり、あなたの上着を奪い取る者には下着をも拒むな」とある。この敵を愛する行為は、神の無償の愛であり、神に倣って生活する人間の究極の愛であろう。隣人愛を普遍的な人間行為・行動の原理として唱えるのは、隣人を自分のように愛することが善であるからである。それ以外の何ものでもない。隣人愛が人間の社会・経済状態の平和あるいは人と人の和解をもたらし、社会を構成する人々の福祉(厚生)を向上させると考えられるから、隣人愛は善である。隣人愛を善として愛することが社会の福祉(厚生)を高める<sup>152</sup>と人々は考えている。ゆえに、人びとは愛されるように努力し、人びとから愛され、賞讃されるように努力するべきである。そのような行為は善である<sup>153</sup>。

### 3.2 経済学における善い社会(経済)状態の選択行為と行動

経済学では、上で示してきたような普遍的に共通する社会通念や規範を前提にして人間行為・行動の原理が考察されるが、経済学では取引・交換によってそれぞれの人の福祉(厚生)を高める行為・行動が考察される。ここでは、社会の構成員である任意の人間(個人)が社会・経済状態を選択する行為・行動について説明する。社会・経済状態において、生産物(たとえば食物)の選択行為・行動について説明する。その選択において、人間は悪い社会・経済状態より善い社会・経済状態を目指し、善い社会・経済状態の選択における状態の順序付けをなすとしよう<sup>154</sup>。つまり、人間は社会・経済状態に順序付けを行い、より善い社会・経済

<sup>152</sup> 『コリント人への第一の手紙』第13章1から3節において、使徒パウロは愛の属性について列挙している。つまり、人々の言葉や御使いの言葉があっても「愛がなければ」やかましい鐘や鐃じやうはちに同じである、信仰があっても「愛がなければ、わたしは無に等しい」、また自分の財産を人に施しても、自分の身体を焼かれるために渡しても、「愛がなければ、いっさいは無益である」と言っている。さらに「愛は寛容」、「愛は情深い」、「ねたむことをしない」、「愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない」、愛は「不義を喜ばないで真理を喜ぶ」、愛は「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」と使徒パウロは言っている。

<sup>153</sup> 前掲書『快樂について』(第2巻 ストア主義論駁)214ページ5から7行目に「第一に、善とは悪の欠如で、危険や心配や苦勞がないことです。第二に、善とは愛されることで、これが快樂の源泉です」とある。その211ページでは、ヴァッラは、ストア学派の高潔な徳は空疎で無益な言葉であると言い、高潔は行為ではなく、人間の行動の動機(原動力)にはならないと言う。

<sup>154</sup> 人(個人)は悪徳を選択の集合から除く。すなわち悪徳を人(個人)は避けると仮定する。悪徳は負の満足(快樂あるいは幸福)をもたらす。悪徳には、害をもたらすものと害をもたらすことのないものがあるが、前者の悪徳には悪意、残酷、貪欲、怒り、偽証などがあり、後者の悪徳には怠惰、食道楽、無為、惰眠、下



状態を欲し(希望し), より悪い社会(経済)状態を恐れる<sup>155</sup>と仮定しよう。ここでは差し当たり, 善い社会・経済状態の集まりは可算集合(countable set)あるいは善い社会・経済状態の集まりは可付番集合(denumerable set)であるとする。この集合を $X$ とする。この集合の要素(元)は, 個々の善い社会・経済状態の集まりであり, その集合の要素(元)を $x$ とすると,  $x \in X$ と表される。任意の二つの善い社会・経済状態 $x, y$ をその集合から取り出すと,  $x, y \in X$ と表される。任意の二つの善い社会・経済状態には順序が付けられ, それには数学の意味での二項関係が成り立つと仮定するが, その二項関係は記号 $R$ で示され,  $R$ は集合 $X$ 上での二項関係を与える<sup>156</sup>。

### 3.2.1 善い社会・経済状態の二項関係とその記号表現

この二項関係の性質を記号で示しておくことにする。それは,  $R$ は $X$ 上での二項関係であり,  $x, y \in X$ であるならば,

- (1)  ${}_xR_y$ すなわち $(x, y) \in R$ ,
- (2)  ${}_yR_x$ すなわち $(y, x) \in R$ ,
- (3)  $\text{not } {}_xR_y$ <sup>157</sup>すなわち $(x, y) \notin R$ ,
- (4)  $\text{not } {}_yR_x$ , すなわち $(y, x) \notin R$ ,

上の4つの関係が成立する。この二項関係には, 一般的には, いくつかの性質が仮定される。

#### (1) 反射関係

集合 $X$ において, 任意の $x \in X$ に対して,  $x$ 自身が $R$ をもつ<sup>158</sup>。

#### (2) 対称関係

集合 $X$ において, 任意の $x, y \in X$ に対して,  ${}_xR_y$ が成立するときに ${}_yR_x$ が成立する<sup>159</sup>。

劣などがある(前掲書『快樂について』(第3巻 キリスト教的快樂説) 388ページ1から3行目参照)。本稿では, 人(個人)は悪徳を嫌悪・憎悪すると仮定する。悪徳は, 第一の悪徳のように害を及ぼすからであり, 第二の悪徳は害をもたらさないが, たとえば怠惰な自分自身を嫌悪するからである。

<sup>155</sup> このことをスピノザは人間の本性であるとしている(スピノザ著(畠中尚志訳)『神学・政治論—聖書の批判と言論の自由—』(上) 40ページ5から6行目参照)。

<sup>156</sup>  $R$ は $X$ 上の全二項関係の部分集合である。全二項関係の集合は $\{(x, y): x, y \in X\}$ と表される。これは $X$ からの全二項関係を表す集合である。

<sup>157</sup>  $\text{not } {}_xR_y$ は, 数学の記号を使うと,  $\neg {}_xR_y$ と表される。

<sup>158</sup> 反射関係は, 数学的には,  $\forall x \in X, {}_xR_x$ と表される。もし $\forall x \in X, \text{not } {}_xR_x$ であれば, 反射関係はない(非反射関係)。

<sup>159</sup> 対称関係は, 数学的には,  $\forall x, y \in X, {}_xR_y \Rightarrow {}_yR_x$ と表される。もし $\forall x, y \in X, {}_xR_y \Rightarrow \text{not } {}_yR_x$ であれば, 対称関係はない(非対称関係がある)。反対称関係とは, 数学的に,  $\forall x, y \in X$ に対して,  $({}_xR_y \wedge {}_yR_x) \Rightarrow x = y$ である。ここで $\wedge$ は ${}_xR_y$ も ${}_yR_x$ も成立することを意味する(この記号 $\wedge$ は論理積を表す)。

## (3) 非対称関係

集合  $X$  において、任意の  $x, y \in X$  に対して、 ${}_xR_y$  が成立するときに  $\text{not } {}_yR_x$  が成立する。

## (4) 推移関係

集合  $X$  において、任意の  $x, y, z \in X$  に対して、 $x$  と  $y$  の間に二項関係  $R$  が成立し、 $z$  と  $y$  の間にも二項関係が成立するとき、 $x$  と  $z$  の間にも二項関係  $R$  が成立する。

この関係を数学的に表すと、

$$\forall x, y, z \in X, ({}_xR_y \wedge {}_yR_z) \Rightarrow {}_xR_z \quad (1.1)$$

となる<sup>160</sup>。

## (5) 連結関係 (完備関係)

集合  $X$  において、任意の  $x, y \in X$  に対して、 $x$  と  $y$  の間に、あるいは  $y$  と  $x$  の間に二項関係  $R$  が成立する。この関係は数学的には

$$\forall x, y \in X, ({}_xR_y \vee {}_yR_x) \quad (1.2)$$

と表される<sup>161</sup>。ここで  $x \neq y$  で、 $\forall x, y \in X ({}_xR_y \vee {}_yR_x)$  が成立するならば、弱連結関係が成立する。

上の二項関係の性質の間に見られる関係を示しておこう。

(1) 非対称関係であれば、非反射関係となる<sup>162</sup>。

(2) 非反射関係であり、かつ、推移関係であるとき、非対称関係が成立する。

この(2)の証明を示しておこう。背理法で証明する。非対称関係でなく対称関係が成立するとしよう。すなわち、 $\forall x, y \in X, {}_xR_y \Rightarrow {}_yR_x$  である。すなわち、 $(x, y) \in R$  かつ  $(y, x) \in R$  が成立するとしよう。推移関係から  $(x, x) \in R$  となるが、しかし、これは非反射関係に反し矛盾である。よって、非対称関係が成立することになる。

## 3.2.2 社会・経済状態の弱順序 (weak order) とその定義

社会・経済状態の集合  $X$  上での二項関係 ( $R$ ) が弱順序であるとは、

$$(1) \text{非対称関係, かつ } (2) \text{否定の推移関係} \quad (1.3)$$

<sup>160</sup> 否定の推移関係は、 $\forall x, y, z \in X, (\neg {}_xR_y \wedge \neg {}_yR_z) \Rightarrow \neg {}_xR_z$  と表される。

<sup>161</sup> ここで  $\vee$  は、 ${}_xR_y$  あるいは  ${}_yR_x$  が成立することを意味する。

<sup>162</sup> この証明は背理法による。すなわち、反射関係 (非反射関係の否定) であるとするならば、矛盾が発生すること、つまり、証明が成立する。反射関係が成立すると、 $\forall x \in X, (x, x) \in R$  となる。非対称関係は、 $(x, x) \in R$  かつ  $(x, x) \notin R$  をいみするので、矛盾する。よって、非対称関係ならば、非反射関係になる。

が成立する<sup>163</sup> ことである。すなわち、(1)の非対称性関係とは、任意の  $x, y \in X$  に対して、 $(x, y) \in R$  ならば、 $(y, x) \notin R$  である。(2)の否定の推移関係とは、任意の  $x, y, z \in X$  に対して、 $(x, y) \notin R$  かつ  $(y, z) \notin R$  ならば、 $(x, z) \notin R$  である。

たとえば、弱順序の二項関係の例として、実数（ここでは実数の集合を  $X$  とする）上での二項関係を  $<$  と示す。この場合、非対称性関係は、任意の  $x, y \in X$  に対して  $x < y$  ならば、 $y < x$  ではない、と表される。否定の推移関係は、任意の  $x, y, z \in X$  に対して  $x < y$  でなく、かつ、 $y < z$  でないならば、 $x < z$  ではない、と表される。また、たとえば、美德の順序付けについて試みて見よう。人間の行為には、勇気のある行為と臆病な行為とがあることは知られているが、勇気の反対の行為として蛮勇（野蛮）な行為がある。社会状態（集合  $X$ ）が勇気(C)、臆病(T)、蛮勇(R)から構成されるとしよう<sup>164</sup>。勇気(C)は臆病(R)より選好され、勇気(C)は蛮勇(R)よりも選好される。このとき、 $T < C$  ならば、 $C < T$  ではない。同様に、 $R < C$  ならば、 $C < R$  ではない。よって、非対称性関係が成立する。臆病と蛮勇のいずれが選好されるかは一般的には確定できないが、もし臆病(T)が蛮勇(R)より選好されるならば、否定の推移関係が成立する。すなわち、 $C < T$  でなく、かつ、 $T < R$  でないならば、 $C < R$  ではない。しかし、一般には、臆病と蛮勇の選好関係は無差別であるとされるかも知れない。無差別な社会状態を順序づけるためには、社会状態の選好が厳格に順序づけられている必要がある。この場合には、順序付けが可能になる。美德には、勇気や愛想のほかに、勤勉<sup>165</sup> や気前のよさ<sup>166</sup> などがある。次のような場合、貪欲で浪費家や、放蕩者で見せかけの儉約家などの行為<sup>167</sup> については、順序付けするのは難しい。

### 3.2.3 社会・経済状態の弱順序と選好 (Preference)

経済学では、社会・経済状態の選好を示す記号として  $<$  あるいは  $\sim$  が使用される。 $x <$

<sup>163</sup> 非対称関係と否定の推移関係が成立すると、推移関係が成立する。この証明は背理法で示すことができる。今、任意の  $x, y, z \in X$  に対して、 $(x, y) \in R$  かつ  $(y, z) \in R$  ならば、 $(x, z) \notin R$  であるとしよう。非対称関係より、 $(x, y) \in R$  のときには、 $(y, x) \notin R$  となる。これは想定に反し矛盾する。ゆえに、命題は証明された。

<sup>164</sup> このような美德の順序付けには、勇気だけではなく、他にも引き合いに挙げることができる。たとえば、愛想(A)、卑猥(I)、粗野(V)の間での選好関係では、愛想は卑猥より選好され、粗野よりも選好される。このとき、非対称関係は成立する。

<sup>165</sup> {勤勉, 好奇心, 貪欲} =  $X$  とし、勤勉は好奇心より選好され、貪欲よりも選好される。同時に、好奇心は貪欲より選好される。このときには、非対称性関係および否定の対称関係が成立する。すなわち、集合  $X$  において選好の非対称性関係と否定の推移関係が成立する。

<sup>166</sup> {気前のよさ, 浪費, 貪欲} =  $X$  とするとき、集合  $X$  において、選好の二項関係において、非対称関係と否定の推移関係が成立する。

<sup>167</sup> 悪徳の混合した行為については、前掲書『快樂について』(第1巻 ストア主義讚美とエピクロス主義讚美) 37ページ12から38ページ11行目参照。悪徳の混合した行為について順序づけるのは難しい。

$y$  は、 $y$  は  $x$  よりも選好される、あるいは  $x$  は  $y$  より低く選好される。厳格な選好関係がないときには、 $x \sim y$  と表される。これは、 $x$  が  $y$  と同じくらい選好されることを示している。すなわち、このことは

$$x \sim y \Leftrightarrow (\text{not } {}_xR_y, \text{not } {}_yR_x) \quad (1.4)$$

と表される。 $\sim$  は無差別な選好を意味している。

弱順序としての選好  $<$  (無差別関係  $\sim$  も含む) が社会・経済状態の集合  $X$  上で二項関係が成立するとしよう。この社会・経済状態の選好に関する二項関係の性質 (特徴) を示しておこう。先に見たように弱順序の二項関係には非対称関係かつ否定の推移関係である。社会・経済状態  $X$  上での選好の二項関係には、非対称関係かつ否定の推移関係が成立するとしよう。このもとで、弱順序における選好の性質が成立する。

- (1) 任意の  $x, y \in X$  に対して  $x < y$ ,  $y < x$ ,  $x \sim y$  のいずれかが成立する
- (2) 選好  $<$  は推移関係である
- (3) 無差別な選好  $\sim$  は同値関係である
- (4)  $(x < y, y \sim z) \Rightarrow x < z$  あるいは  $(x \sim y, y < z) \Rightarrow x < z$  の関係が成立する
- (5) 選好  $\leq$  は推移関係、かつ連結関係 (完備関係) である

これらの(1)から(5)の関係について簡単に説明しておこう。

(1)については、選好関係  $<$  が非対称関係であるので  $x < y$  であれば、 $y < x$  ではない。逆に、 $y < x$  であれば、 $x < y$  ではない。ゆえに、 $x < y$  あるいは  $y < x$  のいずれかが成立する。また、 $y < x$  でなく、かつ、 $x < y$  でないときには、 $x \sim y$  の関係が成立する。ゆえに、このときには、無差別を示す選好  $\sim$  が成立する。

(2)選好関係  $<$  が否定の推移関係にあるとき、

$$x < y \Rightarrow \{(x < z) \vee (z < y)\} \quad (1.5)$$

が成立する。これは、 $x < y$  ならば、 $x < z$  あるいは  $z < y$  であることを意味している。今、 $x < y$  かつ  $y < z$  であると想定しよう。 $x < y$  のときには、 $x < z$  あるいは  $z < y$  が成立する、かつ  $y < z$  のときには、 $y < x$  あるいは  $x < z$  が成立する。従って、 $x < z$  は成立する。しかし、選好の非対称関係から、 $x < y$  が想定されているので、 $y < x$  は成立しない。また、 $y < z$  が想定されているので、 $z < y$  は成立しない。ゆえに、これが成立するとき、 $x < y$  かつ  $y < z$  のもとでは、 $x < z$  が成立する。ゆえに、選好  $<$  は推移関係にある。

次に  $\sim$  の推移関係を示そう。 $x \sim y, y \sim z$  であるが、 $x \sim z$  ではないとしよう。このと

き、(1)の性質から、 $x$ と $z$ が無差別でないならば、 $z < x$ あるいは $x < z$ である。もし $z < x$ ならば、 $z < y$ あるいは $y < x$ であるが、これは前提に矛盾する。よって、想定が間違いであった。ゆえに、選好は、 $x \sim y, y \sim z$ であるので、推移関係が成立する。

(3)上の(2)から選好 $\sim$ は推移関係にある。また、 $x \sim y$ かつ $y \sim x$ が成立する。これは対称関係である。さらに、対称関係は、推移関係によって、 $x \sim x$ となる。これは反射関係である。よって、選好 $\sim$ は、反射関係、対称関係かつ推移関係となる。ゆえに、選好 $\sim$ は同値関係にある。

(4) ( $x < y, y \sim z$ )を想定しよう。このとき、 $x < y$ ならば、 $x < z$ あるいは $z < y$ である。 $y \sim z$ ならば、 $z < y$ は仮定に反する。この想定のもとでは、 $x < z$ となる。また( $x \sim y, y < z$ )を想定する。 $y < z$ ならば、 $y < x$ あるいは $x < z$ 。しかし、 $y < x$ は仮定に反するので、 $x < z$ が得られる。

(5)選好 $\leq$ が推移関係であることは、上の(2)、(3)および(4)から得られる。

### 3.2.4 選好 $\sim$ の意味

二つの社会・経済状態が無差別であるということは、二つの社会・経済状態が同じほどに善いと人間が感じることである。

今、二つの社会・経済状態を $x, y$ とする。経済学では、社会・経済状態 $x$ と社会・経済状態 $y$ では差がないとき、選好関係では $x \sim y$ であると説明する。しかし、実際の社会・経済状態(生活する人間の社会・経済状態)が無差別であるというときに、その二つの社会・経済状態が無差別であると人は判断しているのであろうか。たとえば、二つの状態が無差別であるとするとときに人間は二つの状態に関する選好が不確実であるかもしれない。もし人間が $x$ や $y$ 状態の選好について確実に知ることがないならば、人間は両者の社会・経済状態を比較することが困難であるかも知れない。または二つの状態で $x$ がより善いか、あるいはより劣るかについては確かではないが、人間は厳密な順序付けに身を委ねるかもしれない。さらに、人間は、二つの社会・経済状態を比較することができないときにも、無差別であると判断するかも知れない。

選好の二項関係において、 $x$ が $y$ より選好されたならば、同時に $y$ は $x$ より選好されることはないことは確実に成立すると言えよう。選好の二項関係の性質で人間の行動が一貫しているためには、その二項関係に非対称関係が成立することが必要であるが、これは、 $x$ が $y$ より選好され、かつ $y$ が $z$ より選好されるとき、 $x$ は $z$ より選好される。これは推移関係であった。(1.3)式(すなわち、脚注163)で示したように、この推移関係は、非対称関係と否定の推移関係が成立するときに成立する。

推移関係が成立しない選好が多くの研究者によって示されて来た。たとえば、1,000万円

の配分が最善の配分であり、この配分からいずれの方向にそれでも選好水準は低下するとしよう。このとき、960万円は950万円より選好されるが、960万円と1,080万円のいずれが選好されるのか確実ではない。また950万円と1,080万円のいずれが選好されるのか確実ではない。この場合、(1.5)式の関係が成立しなくなる。すなわち、 $950 < 960$ であるが、 $950 \sim 1080$ であり、また $960 \sim 1080$ である<sup>168</sup>。この両者を区別する能力が人間にはないことになる。この問題が生じないような選好の順序付けを想定することが経済学において必要にされた。

### 3.2.5 弱順序選好の修正

選好が $\sim$ の無差別関係にある善い社会・経済状態の間に区別する能力を人間に賦与することにしよう。集合 $X$ において二項関係 $R$ (あるいは、 $\sim$ )によって生成される集合を $X/R$ あるいは $X/\sim$ とする。今、 $\exists x \in X$ に対して、無差別になる状態の集合を $R(x)$ とすると、

$$R(x) = \{y: y \in X, y \sim x\}$$

と表される。また、 $x, y \in X$ に対して、 $R(x) = R(y) \Leftrightarrow xRy$ のときに、 $x, y$ は同値類に属するという。

無差別な選好関係 $\sim$ によって生成される集合 $X/\sim$ 上での選好を考察してみよう。ある二つの社会・経済状態がそれぞれ異なった同値類に属しているとしよう。今、 $\exists x \in A$ および $\exists y \in B$ に対して

$$A <^0 B \Leftrightarrow x < y \quad (1.6)$$

とすると、選好 $<^0$ は厳密な順序(strict order)となる。

選好が厳密な順序であるならば、その選好が非対称関係、否定の推移関係および弱連結関係が成立する。逆も成立する。最初に、その非対称関係を示す。これは背理法によって証明される<sup>169</sup>。次に、否定の推移関係を示そう。これは直接的に証明される。すなわち、 $\exists x \in A$   $\exists y \in B$ に対して $A <^0 B$ かつ $x < y$ としよう。(1.5)式から、 $z \in X/\sim$ かつ $z \in C$ に対して、 $x < y$ のとき、 $x < z$ あるいは $z < y$ である。よって、

<sup>168</sup> ここで取りあげた例は、Fishburn, P.C. (1970), *Utility Theory For Decision Making*, 12ページ参照。

<sup>169</sup>  $x \sim x'$ かつ $y \sim y'$ 、 $\exists x, x' \in A$ および $\exists y, y' \in B$ に対して、 $A <^0 B$ および $B <^0 A$ ならば、そのとき $x < y$ および $y' < x'$ ならば、反射関係より、 $x \sim x'$ は $x' \sim x$ となる。弱選好の性質の(4)から、すなわち $(x' \sim x \wedge x < y)$ から $x' < y$ となる。また(4)の性質より、 $(x' < y, y \sim y')$ より、 $x' < y'$ となる。これは、 $y' < x'$ の想定に矛盾する。よって、非対称関係は成立する。

$$A < C \text{ あるいは } C < B$$

となる。ゆえに、否定の対称関係が成立する。

最後に、弱連結関係が成立することを示そう。 $A, B \in X/\sim$  および  $A \neq B$  とする。 $A$  と  $B$  は互いに素であるので、 $\exists x \in A$  および  $\exists y \in B$  であるときには、 $\text{not } x \sim y$  である。弱順序における選好の性質の(1)から、 $x < y$  あるいは  $y < x$  である。よって、 $x < y$  ならば、 $A <^0 B$  となり、 $y < x$  ならば、 $B <^0 A$  となる。ゆえに、 $A \neq B$  ならば、 $A <^0 B$  あるいは  $B <^0 A$  であるので、選好  $X/\sim$  は弱連結関係をもつ。以上では、集合  $X/\sim$  上で選好  $<^0$  が厳密に順序づけられることを示し、そして選好  $<$  が集合  $X$  において弱順序であることを示した。勿論、集合  $X$  は、互いに素な同値類の集まり  $X/\sim$  に分割される。

身体の善として、ロレンツォ・ヴァッラは「その第一は健康、第二は美しさ、第三は力、それからほかの善」<sup>170</sup> を挙げている。彼は、身体の善の中で身体の美を第一位にしている。彼は、エピクロス主義の讚美において、身体や精神に快樂<sup>171</sup> をもたらすものは善であると主張している。彼の身体の善に関する順序付けは、エラスムスの順序付け（位置づけ）と大きく異なる。エラスムスは、知識を第一位に位置づけて、次に続けて、健康、天賦の才能、雄弁、美貌、強壯、地位、寵愛、権勢、繁栄、名声、家柄、友人、家財としている<sup>172</sup>。これらは、「中間的なもの」に含まれるとしている。この「中間的なもの」（集合）の中にある各項目の善は、選好  $\sim$  関係で示されると想定できる。すなわち、集合  $X/\sim$  は、

{知識, 健康, 天賦の才能, 雄弁, 美貌, 強壯, 地位, 寵愛, 権勢, 繁栄, 名声, 家柄, 友人, 家財}

と表される。このように「中間的なもの」を集合  $X/\sim$  と表し、たとえば、知識( $k$ )と健康( $h$ )が異なった同値類に属し、そして  $k \in K$ ,  $h \in H$  とするとき、

<sup>170</sup> 前掲書『快樂について』（第1巻 ストア主義讚美とエピクロス主義讚美）85ページ10から11行目。彼は、ホメロス『イリアス』からトロイ戦争の原因となったヘレネスの美を引き合いに出し、身体の美が人間行動の第一位の要因と考えているのであろうか。

<sup>171</sup> 上掲書『快樂について』（第3巻 キリスト教的快樂説）370ページ4から371ページ8行目参照。ここで、彼は、快樂は「喜び」や「楽しみ」を意味し、「わたしは喜ばされる」に由来しているという。ここで、彼は、快樂を至福と解釈し、『創世記』第2章の「エデンの園」を「快樂の園」と解釈している。また、『詩篇』第36篇8節「あなたの家の豊かなのによって飽き足りる。あなたはその楽しみ川のの水を彼らに飲ませられる」（日本聖書協会編 1968）の後半部分をヴァッラは「七十人訳聖書」によって、「あなたは快樂の流れによって、かれらの渴きを癒やすであらう」と解釈している。すなわち「楽しみ」を「快樂」と解釈している。

<sup>172</sup> エラスムス著（金子晴勇訳）『エンキリディオン』（第13章 第四教則）71ページ19から72ページ2行目参照。また拙著『エラスムスの『エンキリディオン』と彼の人間観ならびにその社会観—知識人の人間観ならびにその社会観（1）—』75ページ参照。

$$H <^0 K \Leftrightarrow h < k$$

となるならば、厳密な順序付けが中間的なものの集合の要素の間におかれる。エラスムスは、これら中間的なものは、敬虔生活に達する途中のものとして位置づけて、最高善はキリストに至る（キリストと一体になる）ことであるとしている。

### 3.2.6 幸福度あるいは快樂としての効用関数

集合  $X$  が弱順序であり、かつ、 $X/\sim$  が可付番集合であるとき、社会・経済状態の選好と幸福度（あるいは快樂）と間には正の関係が成立する。二つの社会・経済状態  $x, y \in X$  に対して、

$$x < y \Leftrightarrow u(x) < u(y) \quad (1.7)$$

という関係が成立し、また

$$x \sim y \Leftrightarrow u(x) = u(y) \quad (1.8)$$

となる。(1.7)式と(1.8)式から、二つの社会状態  $x, y \in X$  に対して、

$$x \leq y \Leftrightarrow u(x) \leq u(y) \quad (1.9)$$

が得られる。ここで幸福度を表す関数は効用関数<sup>173</sup>と経済学では呼ばれる。この関数は集合  $X$  上での選好順序が保存されることを(1.9)式は示している。(1.7), (1.8), および(1.9)式から、人間が善い社会・経済状態の順序付けができれば、彼(彼女)の満足(幸福あるいは快樂)についてもその順序が保存されることを示している。

### 3.2.7 食べ物の選択とその喜び・楽しみ(快樂)

人間は、食物を摂り生命を保つだけではなく、死より生を選好する。また人間は、健康時には絶食することを選ばないであろう、また飢え死にすることを選ぶことはない想定できる。同時に、人間は味覚を刺激する食物の美味しさや旨みから得られる満足あるいは快樂(喜び)を享受する。食物には、四つ足の動物の肉、鳥類の肉で調理した食物、魚類の肉で調理した食物、あるいは野菜で調理した食物や果物などがある。選択する個人によって四つ足の動物の肉料理、鳥(鶏)などの肉料理、あるいは野菜料理の選好における順序付けがなされる。今、食べ物(調理された料理としての食品)の集合を  $X$  とする。これは、いくつかの部

<sup>173</sup> 関数  $u: X \rightarrow \text{Real Number}$  (実数値) が効用関数である。



分集合に分割されると仮定しよう。たとえば、 $X_A$  (動物の肉の調理品)、 $X_B$  (鳥の肉の調理品)、 $X_F$  (魚類の調理品)、 $X_V$  (野菜の調理品)、 $F$  (果物あるいは果物の調理品) の4つの部分集合に分割されよう。人はこれらの部分集合の間に順序付けをできるとすると、たとえば  $X_B < X_A$ 、 $X_F < X_B$  かつ  $X_V < X_B$  とすると、この人は  $X_V < X_A$  かつ  $X_F < X_A$  となり、動物の肉料理を好む人になる。但し、果物あるいは果物料理は、ほかのすべての調理品と無差別であると仮定している。すなわち  $X_A \sim F$ 、 $X_B \sim F$  かつ  $X_V \sim F$  という関係が成立することになる。この人が料理店で料理を注文するとき、前菜に野菜料理(サラダなどの)、メインな料理として四つ足の動物の肉料理、果物(デザート)を注文するであろう。この人は肉食主義者とよばれる。

肉よりは野菜料理を好む人は菜食主義者とよばれる。この人は、料理店では、野菜料理と果物を注文することになる。この人は  $X_A < X_V$ 、 $X_B < X_V$  かつ  $X_F < X_V$ 、また  $X_A < X_B$  かつ  $X_B < X_F$  であるとしよう。但し、果物あるいは果物料理は、野菜調理品と無差別であると仮定している。すなわち  $X_V \sim X_F$  という関係が成立することになる。この人は料理店で野菜料理と果物を注文することになるであろう。

禁欲主義者は、四つ足の動物や鳥類の肉料理に対する欲望を抑えるが、野菜や果物さらに魚料理に対する欲望は抑制していない。 $X_A < X_V$ 、 $X_B < X_V$  かつ  $X_F \sim X_V$  とする。また、果物あるいは果物料理は、野菜調理品と無差別であると仮定している。すなわち  $X_V \sim X_F$  という関係が成立することになる。禁欲主義者は、野菜料理と魚料理と果物を注文するであろう。食物の集合が可付番集合であり、野菜調理の集合と魚調理の集合が互いに素な同値類であり、また果物の集合もこれら二つの集合と互いに素な同値類であるならば、食物の集合は半順序集合になり、選好は半順序付けが可能になる。

肉食主義者、菜食主義者あるいは禁欲主義者であろうとも、食物の選好に順序付けができるので、料理店に行ったときに、その人は自身の自由意志によって注文することができる。

### 3.2.8 聴覚に係わるものや嗅覚に係わるもの、そしてそれからの喜び・楽しみ(快楽)

人間の聴覚に係わるものには、ことば(言葉、詞、辞)で発せられるものが係わっている。耳に優しいことばや音楽から人は喜び・楽しみを得る。たとえば神を讃美する詩人の言葉、愉快で楽しい音楽<sup>174</sup>、上手な歌い手の歌などがある。また聴覚を刺激する自然からの贈り物

<sup>174</sup> ヨーロッパ中世では音楽は算数、幾何、天文と並んで四大科学の一つであったので、音楽を娯楽としてではなく、世界を解釈する思考のひとつであったと理解される。これはキリスト教による世界の一元的把握の一環として行われた。音楽は学問の一部であった。たとえば、音楽は四季の変化、星の運行、肉体と精神の関係、あるいは霊の調和を表現し、世界が調和していることあるいは調和のとれた宇宙を明らかにするものであったと考えられる。この名残が卒業式や入学式で用いられる音楽である。これは音楽がその儀式の

もある。たとえば小鳥の囀りさえずや小川のせせらぎなどである。これらは、人に喜びを与えるゆえに人に快樂をもたらす。反対に、耳さわりの悪いことば、騒々しい音楽、喧騒な言葉、怒鳴り声、聞きづらい歌声、洪水のときの川・河の音、森の梢を渡る風の音、狼の叫び、獐猛な動物の嘶きいなななどは不快(苦痛)をもたらす、これらは人に負の快樂をもたらす。人間は苦痛(負の快樂)を避け喜び(快樂)を欲する。実際に、人が喜び(快樂)をもたらすあらゆることばや音に順序付けをできるかどうかは確定ではない。ここでは弱順序付けを人は喜び・楽しみ(快樂)をもたらす言葉や音に与えることができると想定しよう。ここでは楽しい音と雑音・騒音を区別する人が想定され、その人は雑音や騒音を避け、楽しい音を喜ぶであろう。音楽(歌を含む)と楽しい音を区別できるかどうかは確定しえないが、これらが無差別であったとしても互いに素な同値類に属するとするならば、人は音声(詩人の言葉)と音楽と音の間に順序付けすることは可能である。

文学好きな人は、詩人の言葉は音楽よりも選好され、また自然の音よりも選好されると仮定しよう。今、音楽の集まりを  $X_M$ 、自然の音の集まりを  $X_S$  とする。これらは  $X$  の部分集合を構成し、この他の部分集合とは素であるとする。ここでは人は  $X_S < X_M$  あるいは  $X_M < X_S$  と選好を示すことができるとする。音楽好きな人は音楽を詩人の言葉より、また自然の音よりも選好する。今、詩人の言葉を  $X_P$  とすると、人は、 $X_S < X_P$  あるいは  $X_P < X_S$  と選好を示すことができるとする。自然讃美者は自然の音を音楽よりも詩人の言葉よりも選好する。同時に、その人は  $X_P < X_M$  あるいは  $X_M < X_P$  と選好を示すことができる。

次に嗅覚について考えて見よう。嗅覚に含まれるものには、自然によって与えられたものとして、花の匂いや香料の匂い ( $X_{SL}$ ) がある。人工的に造られたお香の匂い(香水) ( $X_{PU}$ )、料理の匂い ( $X_{CO}$ ) などがある。これらの匂いも人に喜び・楽しみ(快樂)を与えると考えられる。ここでも人は自然の匂いと人工の香りの匂いの順序付けができるとしよう。喰い道楽者は、料理の匂いを自然の匂いや人工の匂いよりも選好する。自然讃美者は自然の匂いを人工の匂いや料理の匂いより選好する。人工臭第一主義者は自然の匂いより料理の匂いをより選好する。

### 3.2.9 効用関数の分離可能性

人が食物(味覚)から効用(快樂あるいは満足)を得ているだけではなく、音楽や音など(聴

---

重要な一構成要素であることを意味していたことを示唆しているように思われる。

今日の経済学では、音楽は娯楽の側面しかないかのように取り扱われている。本稿のここでも音楽と音は娯楽の一部であると想定して進められている。

覚) からや香りや匂いなどの嗅覚からも効用 (快樂あるいは満足) 得ている。効用関数は、一般に、

$$U(u^1(x^1), u^2(x^2), u^3(x^3), \dots, u^m(x^m)) \quad (2-1)$$

と表される。味覚の集まりを構成する各料理は相互に素であると仮定したので、それらの料理の結合は

$$X_A \cup X_B \cup X_F \cup X_V \cup F = X^1 \quad (2-2)$$

と表され、この任意の二つの部分集合では

$$X_h \cap X_k = \phi \quad h \neq k, \quad h, k = A, B, F, V \quad (2-3)$$

が成立する。聴覚の集まりならび嗅覚の集まりに関しても同様な関係が成立する。すなわち、

$$X_M \cup X_P \cup X_S = X^2, \quad X_M \cap X_P \cap X_S = \phi \quad (2-4)$$

$$X_{SL} \cup X_{PU} \cup X_{CO} = X^3, \quad X_{SL} \cap X_{PU} \cap X_{CO} = \phi \quad (2-5)$$

と表される。この分離可能な効用関数の例として、たとえば

$$U(u(X^1), u(X^2), u(X^3)) \quad (2-6)$$

と表されると想定しよう。(2-6)式の効用関数において個人が選好関係を決めるときは2段階で決定する。最初、味覚、聴覚、嗅覚のいずれかを選好するかを決め、次にそれぞれの味覚、聴覚、嗅覚のなかで順序付けをして選好を決める。たとえば、味覚の中で順序付けをするとは、四つ足の動物の肉料理、鶏(鳥)の肉料理、魚の肉料理、野菜料理、果物(デザート)のなかで順序付けをし、自身の味覚を満足させている。ここで

$$X^1 \cap X^2 \cap X^3 = \phi \quad (2-7)$$

と仮定する。この仮定は、味覚を楽しませるものと聴覚を楽しませるものが異なった集合に属し、ならびに味覚と嗅覚を楽しませる集合に属するものの重なり合うことがないとする。同様に聴覚と嗅覚を楽しませるものとが重なりあうことがないと仮定する。ゆえに、この仮定のもとでは、味覚からの楽しみが増加しても他の聴覚や嗅覚には何の影響もしないことになる。個人は、味覚からの喜びと聴覚からの楽しみと嗅覚からの満足を加えることが可能であるとすると、個人の全体効用(喜び・楽しみ・満足の総和)が得られることになる。(2-6)

式の効用関数において、味覚からの効用、聴覚からの効用、ならびに嗅覚からの効用を加えることができると、それは

$$U = U(u(X^1), u(X^2), u(X^3)) = u(X^1) + u(X^2) + u(X^3) \quad (2-6)'$$

と表される。ここで

$$V^i = u(X^i)$$

とすると、

$$U = \sum_{i=1}^3 V^i = \sum_{i=1}^3 u(X^i) \quad (2-7)$$

と示される。

個人は自身の「自由意志」によって、自身の味覚を満たし、聴覚を楽しませ、さらに嗅覚を楽しませることができる。そして個人は自身の喜び・楽しみ（快樂あるいは幸福）を充足させることができる。その充足がすべて神の恵み（恩恵）の結果であるとするのか、あるいは、神の恩恵に幫助された人間の「自由意志」が自身の味覚、聴覚、ならびに嗅覚を充足させているとするのかは、喜びや楽しみが神の恩恵であるのか、それとも人間の「自由意志」の結果なのかによっている。神の存在を信じるか、あるいは神の存在を認めないかによると考えられる。純粹理性的には、人間の「自由意志」によって選好関係が示されるのであろうが、実践的理性では、神の恩恵の幫助の結果であるとも言える。

### 3.3 最高善としての至福から市民社会の制約

エラスムスはキリストに倣う生活が最高であると考えていた。それ故、エラスムスには「この世」との戦いの結果はいつも勝利であると確信されたのである。エラスムスは、私たち自身が「キリストのからだのなかにあり、そのかしらによってすべてをなしうる」と説いている。私たちがキリストのからだのなかにあり、そのかしらによってすべてをなしうるとき、その人はキリストに導かれ、キリスト者が「この世」の誤りから逃れて「靈的な生活の純粹な光に達することが容易になる」と確信しているのである<sup>175</sup>。ここにエラスムスには「この世」との戦いにおいて勝利への希望があったのであろう。エラスムスには「この世」での喜び・楽しみ（快樂あるいは幸福）よりも、神によって創造されたことを信じ、神の恩恵に導かれる世界での喜び・楽しみ（快樂あるいは幸福）を選好したと思われるが、エラスムスは

<sup>175</sup> 拙著『エラスムスの『エンキリディオン』と人間観ならびにその社会観—知識人の人間観ならびに社会観(1)—』2ページあるいは9ページ参照。

その世界の景観については表現していない。すべてのものが神の恵み（恩恵）によって与えられるならば、人は自身の味覚によって感じる楽しみ、聴覚によってもたらされる喜び、あるいは嗅覚の喜びに対して何の反対給付をも必要としないであろうが、しかし、限られた資源を使って物質を生み出している場合には、人は自身のうちに楽しみ・喜び（快樂）を抑制する能力を持ち合わせていないならば、「この世」では欲望と欲望の争い/戦いの場となり、戦争状態にあるかもしれない。そのような醜い状態の出現を抑制するために中世の社会では、七つの大罪が社会的・慣習的に信じられていた。すなわち、貪食（暴食）(gula)、好色（色欲）<sup>176</sup> (luxuria)、貪欲（強欲）<sup>177</sup> (avaritia)、怒り（憤怒）(ira)、怠惰 (pigritia)、高慢（傲慢）(superbia)、妬み（嫉妬）(invidia) は醜い大罪（7つの大罪）であった。人が選好の社会・経済状態に順序付けをなし、選好を表明するとき、彼/彼女は自身の喜びや楽しみをほどほどに抑制することが求められる。たとえば、彼/彼女は貪食を避け、貪欲を避ける徳を身に着けている必要があった。同時に好色を抑え、怒りを抑える徳を身に着ける必要があった。また怠惰な生活を避けると同時に自負する高慢な生活も避けなければならなかった。人は怒りを抑え、高慢な姿勢をとらず、羨まず怠惰にならずに日常生活を送るための必要性から徳のある生活が求められた。特に、中世において4つの枢要徳<sup>178</sup>の一つと数えられた「節制」が人間行動には必要であったと考えられる。実際、この節制が選好関係を示すときには、人の欲望に飽和点をもたらすと仮定される。人は喜び・楽しみ（快樂）を求めるが、それには最高の社会・経済状態があり、その人（彼/彼女）はその飽和点以上の快樂を求めない。そのような人は高潔な人と呼ばれたのかもしれない。

しかし、「この世」で7つの徳を満たすことは困難であると思われるが、ヴァツァは、前掲書『快樂について』422ページにおいて「天国においては、ぼくらは榮譽や權威や権力を得るのであるか。宴会をしたり、飲んだり、妻帯したりするのであるか。ぼくはしかし、かれらに言うでしょう。おおいに希望をいだきたまえと。そしてかれらに約束します。かれらの考えるような榮譽や權威や権力をえることはないでしょう。それらは天国においては、勞

<sup>176</sup> 好色の問題については、拙著『今日の経済学と戦士ヨブの潔白な誓い』第6節の6.3（好色の問題）26ページから31ページを参照。好色の問題は視覚（目から入る楽しみあるいは喜び）である。エラスムスは好色を「醜い好色の罪」として、すなわち、「一時的な肉欲の醜い快感」と説明している。

<sup>177</sup> 貪欲の問題については、拙著『今日の経済学と戦士ヨブの潔白な誓い』第6節の6.2（好色の問題）23ページから26ページを参照。貪欲は富に対する姿勢の問題で、エラスムスは「富を所有することではなく、富を蔑視することが真に偉大」とした。また、エラスムスは「人は必要なものを自然の必要によってではなく、欲望の目標によって量っている」と言っている。多分、自然の必要が人間の欲望であると、それ以上の欲望を貪欲としているのであろう。

<sup>178</sup> 中世における4つの枢要徳とは、知恵、正義、勇氣、節制であった。使徒パウロは、これに信仰、希望、愛を加えて、7つの徳とした。本稿では、信仰と希望と愛の徳は、ある社会・経済状態の選好をする人には具わっていると仮定している。

苦なき榮譽、妬みなき權威、恨みも危険もない権力であるはずだと<sup>179</sup>と述べている。天国を「最善にして至福の共和国」<sup>180</sup>とし、そこの住民を「永遠の市民たち」<sup>181</sup>としている。人(彼/彼女)は、天国では、永遠の命(生命)を得て人間存在の不死性を獲得する。天国では、身体あるいは肉体の幸福よりも魂(靈魂)の幸福が選好されている。

この永遠の生命あるいは人間存在の不死性が至福の最良状態である。エラスムスは、知識を第一位に位置づけて、次に続けて、健康、天賦の才能、雄弁、美貌、強壯、地位、寵愛、権勢、繁栄、名声、家柄、友人、家財などの、「中間的なもの」に止まることなく、キリストを求めよと言っている。先に述べたように、エラスムスは、キリストを頭として徳のある生活を「この世」で送ることを希望し期待していた。ヴァッラは、『ヨハネの黙示録』によって至高の天を記している<sup>182</sup>。『ヨハネの黙示録』の世界ではキリストを王として悔い改めた人々(永遠の市民)が最良の至福の状態で生活しているのであろうが、それは市民社会の最良状態とは違うのかも知れない。至福の最良状態として、ヴァッラは「至高天」を取りあげ、この至高天は「すべての天のうちで最高の天をなし、大きさの面でも權威の面でも突出していて、ただ視覚ばかりか聴覚も超えています」<sup>183</sup>と言う。さらに、「至高天に達し、光かがやく星々を下方にしています。きみは、虹のかたちをしたあの壮大な門をくぐるでしょう。すでに君たちの前には、あの、至福の人たちの都、神ご自身の都が、あらわれるでしょう。天の広場の中央に、あの、われわれの母国エルサレムがあらわれるでしょう」<sup>184</sup>と記している。

しかし、経済学を支える人々(市民)は『ヨハネの黙示録』の世界を信じた中世の聖職者とは違って、「この世」の市民は悔悛していない市民の集まりである。敢えて言うなれば、エラスムスの意味での「中間的なもの」に止まる傾向の強い人々の集まりである。すなわち、「中間的なもの」に止まっている人には、飽和点がなく、無限に広がる喜び・楽しみ(すなわち快樂)を求める傾向があるのかも知れない。この場合でも、今日の経済学は人々の行為・行動に制約を加えている。それは市民社会の制約である。分業化された社会では人々は、労

<sup>179</sup> 前掲書『快樂について』422ページ4から9行目。

<sup>180</sup> 前掲書『快樂について』422ページ11行目。

<sup>181</sup> 前掲書『快樂について』422ページ11行目。天国の天使の名称をあげている。彼は「ケルビム、セラフィム、力天使、権天使、その他の天使」たちがその天国(共和国)の永遠の市民の位階である、と言う(前掲書『快樂について』422ページ9から12行目参照)。

<sup>182</sup> 前掲書『快樂について』437ページ11から438ページ14行目参照。

<sup>183</sup> 前掲書『快樂について』436ページ14から15行目。

<sup>184</sup> 前掲書『快樂について』437ページ7から10行目。『ヨハネの黙示録』第21章11から14節に「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。それには大きな、高い城壁があって、十二の門があり、それらの門には、十二の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名がそれに書いてあった。東に三つの門、北に三つの門、南の三つの門、西に三つの門があった。また都の城壁には十二の土台があり、それには小羊の十二使徒の十二名がかいてあった」とエルサレムについて記している。

働力を他の人々に提供し、その見返りとして所得を獲得しているが、その獲得される所得の範囲で自身の喜び・楽しみ（快樂）を充足することを余儀なくされ、純粹理性的には可能な無限の拡大が、所得制約によって外生的に制約させる。この所得制約が市民社会から与えられる制約である。

### むすびにかえて

本稿では、第1節で人間の「自由意志」と「神の意志」についての説明し、次に、人間の「自由意志」を過小評価する見解と人間の「自由意志」を過大評価する見解について考察・検討した。第2節では神の恩恵、神の恩恵の定義ならびに三種の恩恵について説明し、さらに人間の「自由意志」と神の恩恵の関係について考察し人間の「自由意志」も神の恩恵も人間の行為・行動には関係しうることを説明した。第3節では今日の経済学における「自由意志」について考察し、人間の普遍的な行動原理と社会・経済状態、および経済学における善い社会・経済状態の選択行為と行動について考察・検討した。今日の経済学における社会・経済状態の選好を数学的な記号を用いて表現し、特に、社会・経済状態の弱順序（あるいは弱順序）における選好関係を示し、幸福度あるいは快樂としての効用関数を例示した。たとえば、聴覚に係わるものや嗅覚に係わるものの喜び・楽しみ（快樂）を効用関数の分離可能性を仮定して提示した。最後に、『聖書』の飽和点のある世界から今日の市民社会の制約のある世界に向かう必要性を指摘し、たとえば、所得制約が飽くなき人間の欲望追求を制約する因子であることを例示した。

筆者自身もエラスムスと同様に人間には「自由意志（意志力）」があると想定しているが、その意志力はいかにして形成されるのか、ルターなど宗教家が説くように神によって与えられるのか、あるいは他の働きに依って形成されるのか。エラスムスが説くように、その一つには教育（知的教育や道徳教育）が人間の意志力を形成する力（要因）になるのであろうと、現時点で筆者は考えている。今日の社会では科学が万能になっているが、エラスムスのように理性の働きも人間行動を測るには大切であろうと思える。

### 引用文献

- (1) デジデリウス・エラスムス著（山内 宣訳）『評論「自由意志」』（1524年）（聖文舎、1977年）
- (2) デジデリウス・エラスムス著（金子晴勇訳）『エンキリディオン』（1504年）（『宗教改革著作集』第2巻（5ページから180ページ）に収録された『エンキリディオン』を使用）（教文館、1989年）
- (3) ベネディクトゥス・スピノザ著（畠中尚志訳）『神学・政治論—聖書の批判と言論の自由—』（上、下）（岩波文庫、1973年）
- (4) マルティン・ルター著（徳善義和ほか訳）『奴隸的意志について』（『ルター著作集』（529から575ページ）取用の『奴隸的意志について』を使用）（教文館、2012年）

- (5) ロレンツォ・ヴァッラ著(近藤恒一訳)『快樂について』(1431年)(岩波文庫, 2014年)
- (6) Fishburn, P.C. (1970), *Utility Theory For Decision Making*, John Wiley & Sons, 1970.
- (7) 日本聖書協会編『出エジプト記』(日本聖書協会編『聖書』の『エゼキエル書』使用)
- (8) 日本聖書協会編『エゼキエル書』(日本聖書協会編『聖書』の『エゼキエル書』使用)
- (9) 日本聖書協会編『エレミヤ書』(日本聖書協会編『聖書』の『エレミヤ書』使用)
- (10) 日本聖書協会編『創世記』(日本聖書協会編『聖書』の『創世記』使用)
- (11) 日本聖書協会編『申命記』(日本聖書協会編『聖書』の『申命記』使用)
- (12) 日本聖書協会編『詩篇』(日本聖書協会編『聖書』の『詩篇』使用)
- (13) 日本聖書協会編『マタイによる福音書』(日本聖書協会編『聖書』の『マタイによる福音書』使用)
- (14) 日本聖書協会編『ルカによる福音書』(日本聖書協会編『聖書』の『ルカによる福音書』使用)
- (15) 日本聖書協会編『ローマ人への手紙』(日本聖書協会編『聖書』の『ローマ人への手紙』使用)
- (16) 日本聖書協会編『テモテへの第二の手紙』(日本聖書協会編『聖書』の『テモテへの第二の手紙』使用)
- (17) 日本聖書協会編『テモテへの第一の手紙』(日本聖書協会編『聖書』の『テモテへの第一の手紙』使用)
- (18) 日本聖書協会編『コリント人への第一の手紙』(日本聖書協会編『聖書』の『コリント人への第一の手紙』使用)
- (19) 日本聖書協会編『サムエル記(下)』(日本聖書協会編『聖書』の『サムエル記』(上)使用)
- (20) 日本聖書協会編『ヨエル書』(日本聖書協会編『聖書』の『ヨナ書』使用)
- (21) 日本聖書協会編『ヨハネによる福音書』(日本聖書協会編『聖書』の『ヨハネによる福音書』使用)
- (22) 久保田義弘著『今日の経済学と戦士ヨブの潔白な誓い』(札幌学院大学経済論集 第12号, 2017年)
- (23) 久保田義弘著『エラスムスの『エンキリディオン』と彼の人間観ならびにその社会観—知識人の人間観ならびにその社会観(1)—』(札幌学院大学経済論集 第12号, 2017年)

#### 参考文献

- (1) Lancaster, Kelvin, *Modern Consumer Theory*, Edward Elgar Publishing Limited, 1991.
- (2) Fishburn, P.C., *Utility Theory for Decision Making*, John Wiley & Sons, 1970.
- (3) Sen, Amartya, *Choice, Welfare and Measurement*, Basil Blackwell, 1982.
- (4) マルティン・ルター著(石原 謙訳)『キリスト者の自由』(岩波文庫, 1978年)
- (5) トマス・ホッブス(水田 洋訳)『リヴァイアサン』(三)(岩波文庫, 1982年)
- (6) マックス・ウェーバー著(梶山 力・大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(上)(下)(岩波文庫, 1971年)
- (7) アダム・スミス著(大内兵衛・松川七郎訳)『諸国民の富』(四)(岩波文庫, 1992年)
- (8) ジョン・ロック著(加藤 節訳)『統治二論』(岩波文庫, 2010年)

(くぼた よしひろ マクロ経済学・金融論)